

宮城平田原遺跡

— 那覇空港自動車道（小禄道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（3） —

令和6（2024）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、那覇空港自動車道（小禄道路）建設に伴い、内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所より委託を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが令和4年度に行った宮城平田原遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

本遺跡が所在する那覇市宮城は、かつて高宮城集落が存在していました。集落ではイモやサトウキビを基幹作物として栽培し、豚の飼育も行われ、ウルクンジーと呼ばれる琉球餅の生産地でもありました。

しかし、昭和初期に始まった小禄飛行場の建設や戦時中の米軍による攻撃、戦後の造成等により、往時の面影は失われてしまいました。

戦後は米軍基地となり、本土復帰後は陸上自衛隊駐屯地として利用されてきたことから、当初は遺跡の有無は明らかではありませんでしたが、事前に那覇市が試掘調査を実施したところ、近世～近代の遺跡が存在することが判明し、開発に先立ち記録保存調査を実施することとなりました。

令和4年度は、平成28年度に試掘調査が行われた範囲を中心に調査区を設置しました。調査を実施した結果、近世以降の道路に関する溝や石列のほか、近代の石組などの遺構や遺物が見つかり、当時の集落での生業の一端をうかがい知る資料が得られました。本報告書が、沖縄県の歴史・文化を理解する資料として活用されるとともに、文化財の保存や活用の一助となれば幸いです。

最後に、現地調査から資料整理にあたり、御指導、御協力を賜りました関係機関及び関係者各位に心より感謝申し上げます。

令和6（2024）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 前田 直昭

例 言

1 本報告書は、沖縄県那覇市宮城小字平田原（陸上自衛隊那覇駐屯地内）に所在する宮城平田原遺跡において令和4年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の成果を記したものである。

2 発掘調査は、那覇空港自動車道（小祿道路）建設工事に伴う記録保存調査である。

3 発掘調査及び資料整理業務の費用は、事業者である内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所（以下、南部国道事務所）が負担した。

4 南部国道事務所との契約に基づき、発掘調査は令和4年度に実施し、資料整理作業及び報告書作成作業は令和5年度に実施した。

5 現地調査の実施にあたっては、那覇市教育委員会文化財課、陸上自衛隊那覇駐屯地の協力を得た。

6 発掘調査及び資料整理作業、報告書作成・編集は調査班員、資料整理員の協力を得て馬上理恵子、宮城淳一が行った。

7 本書に掲載した地図（図2・図6）は国土地理院の地理院地図（<https://maps.gsi.go.jp/>）をもとに作成している。

8 本書に掲載した地図（図3）は沖縄県立図書館貴重資料デジタル書庫（https://www.library.pref.okinawa.jp/item/index-1101396315_1007901869.html）をもとに作成している。

9 本書に掲載した測量図（図4）は今昔マップ（<https://ktgis.net/kjmapw/>）をもとに作成している。

10 本書に掲載した航空写真（図5）は国土地理院の地図・空中写真閲覧サービス（<https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do?sessionId=7796CAED8E51A710393451939884B41C#1>）をもとに作成している。

11 本報告で掲載した緯度、経度、平面直角座標は、すべて世界測地系に基づくものである。

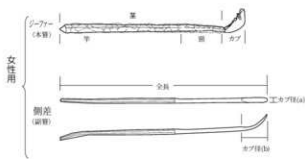
12 土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に基づくものである。

13 本報告書に掲載された写真は、現地調査状況を宮城淳一、馬上理恵子が撮影した。遺物写真は馬上理恵子が撮影した。

14 引用・参考文献は、巻末にまとめた。

15 現地調査で得られた遺物、実測図及び写真等の記録は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターに保管している。

簪の部位名称



目次

序		
例言		
第1章 発掘調査に至る経緯と経過		
第1節 調査に至る経緯	1	
第2節 調査体制	1	
第3節 発掘作業の経過	2	
第4節 資料整理作業の経過	2	
第2章 遺跡の位置と環境		
第1節 地理的環境	3	
第2節 歴史的環境	3	
第3章 発掘調査の方法と成果		
第1節 調査の方法	8	
第2節 基本層序	8	
第3節 遺構と遺物	10	
1 第1検出面(近代)	11	
2 第2検出面(近世)	17	
第4章 総括	42	
引用・参考文献	44	
巻末図版	47	
報告書抄録		
図1 沖縄県の位置	4	
図2 宮城平原原遺跡の位置及び周辺遺跡	5	
図3 琉球国惣絵図	6	
図4 大正8年測量図	6	
図5 1945年12月米軍撮影空中写真	7	
図6 2010年9月国土地理院撮影空中写真	7	
図7 西壁・南壁土層断面図	9	
図8 遺構平面図	10	
図9 SK1平面・土層断面図	11	
図10 SK2平面・土層断面図	12	
図11 SK2出土遺物	13	
図12 SD1土層断面図	13	
図13 SE1平面・土層断面図	14	
図14 SS1平面図	15	
図15 SS1土層断面図	15	
図16 SS1出土遺物	16	
図17 SF1平面・立面図	17	
図18 SF1土層断面図	17	
図19 SF1出土遺物	18	
図20 SD4～6遺構平面図	19	
図21 SD2～5土層断面図	19	
図22 SD4～6土層断面図	19	
図23 SD4出土遺物	20	
図24 SD9・17遺構平面図	22	
図25 SD7～16土層断面図	23	
図26 SD7～16サブトレンチ土層断面図	23	
図27 SD7・9～16土層断面図	23	
図28 SD8出土遺物	24	
図29 SD9出土遺物	24	
図30 SD12出土遺物	24	
図31 SD13出土遺物	24	
図32 SD16出土遺物	24	
図33 SD17サブトレンチ土層断面図	24	
図34 SD17土層断面図	24	
図35 II-3層出土遺物	25	
図36 I層出土遺物	26	
図37 字高宮城航空写真と調査区重ね図及び拡大図	43	

挿表目次

表 1	本土産磁器分類 (碗・小碗) ……………	11
表 2	沖繩産施釉陶器分類 (碗・小碗) ……………	11
表 3	脊椎動物遺体種類一覧 ……………	11
表 4	貝類の生息場所類型 ……………	11
表 5	SK 2 出土遺物観察一覧 ……………	13
表 6	SS 1 出土遺物観察一覧 ……………	16
表 7	SF 1 出土遺物観察一覧 ……………	18
表 8	SD 4 出土遺物観察一覧 ……………	21
表 9	SD 8、9、12、13、16 出土遺物観察一覧 ……	24
表 10	II - 3 層出土遺物観察一覧 ……………	25
表 11	I 層出土遺物観察一覧 ……………	26
表 12	出土遺物集計表 1 ……………	27
表 13	出土遺物集計表 2 ……………	28
表 14	出土遺物集計表 3 ……………	29
表 15	出土遺物集計表 4 ……………	30
表 16	脊椎動物遺体出土一覧 ……………	31
表 17	魚類出土状況 ……………	31
表 18	哺乳類・爬虫類出土状況 1 ……………	31
表 19	哺乳類・爬虫類出土状況 2 ……………	32
表 20	哺乳類・爬虫類出土状況 3 ……………	33
表 21	哺乳類・爬虫類出土状況 4 ……………	34
表 22	哺乳類・爬虫類出土状況 5 ……………	35
表 23	哺乳類・爬虫類出土状況 6 ……………	36
表 24	哺乳類・爬虫類出土状況 7 ……………	37
表 25	巻貝類出土状況 1 ……………	38
表 26	巻貝類出土状況 2 ……………	39
表 27	二枚貝出土状況 1 ……………	40
表 28	二枚貝出土状況 2 ……………	41

図版目次

図版 1	調査箇所遠景 ……………	47
図版 2	作業状況 1 ……………	48
図版 3	作業状況 2 ……………	49
図版 4	作業状況 3 ……………	50
図版 5	作業状況 4 ……………	51
図版 6	作業状況 5 ……………	52
図版 7	調査区全体 1 ……………	53
図版 8	調査区全体 2 ……………	54
図版 9	遺構 1 ……………	55
図版 10	遺構 2 ……………	56
図版 11	遺構 3 ……………	57
図版 12	遺構 4 ……………	58
図版 13	遺構 5 ……………	59
図版 14	遺構 6 ……………	60
図版 15	遺構 7 ……………	61
図版 16	出土遺物 1 ……………	62
図版 17	出土遺物 2 ……………	63
図版 18	出土遺物 3 ……………	64
図版 19	出土遺物 4 ……………	65
図版 20	出土遺物 5 ……………	66
図版 21	出土遺物 6 ……………	67
図版 22	脊椎動物遺体 1 ……………	68
図版 23	脊椎動物遺体 2 ……………	69
図版 24	脊椎動物遺体 3 ……………	70
図版 25	巻貝 1 ……………	71
図版 26	巻貝 2 ……………	72
図版 27	巻貝 3・二枚貝 1 ……………	73
図版 28	二枚貝 2 ……………	74

第1章 発掘調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

国道331号は、那覇市街地と沖縄本島南部地域を結ぶ国道である。その一部の小禄バイパスと呼ばれる区間は、那覇市街地と豊見城市・糸満市を結ぶとともに那覇空港への通路でもある。しかし、本道は近年の観光客の増加や豊見城市・糸満市の発展などによる交通渋滞が問題視されている。そのため、内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所（以下、南部国道事務所）は、高規格幹線道路である那覇空港自動車道（国道506号）を「小禄道路」として延伸することにより渋滞対策を図ることを平成21年度に決定し、平成23年度より事業に着手した。

これに伴い工事予定地について、南部国道事務所から那覇市市民文化部文化財課（以下、市文化財課）に対して平成27年6月5日付け府国南事第607号により埋蔵文化財事前審査願が提出された。これを受け市文化財課は、対象地が戦後に米軍基地を経て陸上自衛隊駐屯地となっていることから、埋蔵文化財について事前の把握ができていなかったため、平成28年9月から翌29年3月まで試掘調査を行った。その結果、ミノシンモ古墓群、らくだ山戦争遺跡群A地点、らくだ山戦争遺跡群B地点、鏡水溜屋原B遺跡、鏡水原遺跡、鏡水増過原遺跡が新たに確認されたため、平成29年4月28日付け埋蔵文化財事前審査報告書（事前審査番号27-121-1）により那覇市教育委員会（以下、市教委）から南部国道事務所へ複数の埋蔵文化財が所在する旨の回答を行った。

南部国道事務所は、平成29年8月1日付け府国南事第792号により本発掘調査（以下、本調査）を市文化財課に依頼したが、同年8月14日付け那市文財第168号による回答で、依頼に対応するのは困難とした。そのため南部国道事務所、市文化財課、沖縄県教育庁文化財課（以下、県文化財課）、沖縄県立埋蔵文化財センター（以下、県埋蔵センター）によって調整が行われ、沖縄県が調査に対応することとなり、平成30年10月29日付け府国南事第995号により南部国道事務所から沖縄県に対し本調査依頼が提出された。

沖縄県教育委員会（以下、県教委）と南部国道事務所は、令和3年3月31日付けで『那覇空港自動車道「小禄道路」建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査委託に関する協定書』を締結していたが、宮城平田原遺跡は調査対象に含まれていなかったことから、発掘調査を令和4年度までに終了し、遺物の整理及び発掘調査報告書の作成を令和5年度までに完了とする覚書を令和4年3月22日に締結した。

第2節 調査体制

宮城平田原遺跡の発掘調査は、令和4年度に現地での発掘作業を行い、令和5年度に資料整理・報告書作成を行った。実施体制は以下のとおりである（所属・役職等は当時のもの）。

令和4（2022）年度（発掘調査）	
事業主体	沖縄県教育委員会
教育長	半嶺満
事業所管	沖縄県教育庁文化財課
課長	瑞慶覧勝利
記念物班	班長 仲座久宜 主任専門員 金城貴子
調査所管	沖縄県立埋蔵文化財センター
所長	前田直昭
総務班	班長 池田みき子 主任 石原昌一郎
調査班	班長 中山晋 主任 宮城淳一 専門員 馬上理恵子
発掘調査支援業務委託	国際文化財株式会社
	主任調査員 長尾聡子 主任調査員 土岐耕司 調査員 川尻大 管理技士 青山宗晴
令和5（2023）年度（資料整理）	
事業主体	沖縄県教育委員会
教育長	半嶺満
事業所管	沖縄県教育庁文化財課
課長	瑞慶覧勝利
記念物班	班長 新垣力 主任専門員 片桐千亜紀
調査所管	沖縄県立埋蔵文化財センター
所長	前田直昭
総務班	班長 城間奈津子 主任 石原昌一郎
調査班	班長 中山晋 主任専門員 宮城淳一 専門員 馬上理恵子
資料整理作業	埋蔵文化財資料整理員 赤嶺雅子、伊藤恵美利、大村由美子、 小波津由加里、小橋川久美子、又吉純子

資料整理協力者

亀島慎吾（沖縄県教育庁文化財課）
丸山真史（東海大学人文学部准教授）

第3節 発掘作業の経過

発掘調査着手に向け、発掘調査支援業務委託の発注や沖縄県赤土等流出防止条例に基づく事業行為通知書の届出等の準備を行った。

調査は令和4年8月18日から11月30日まで実施した。調査着手後は令和4年8月22日付け埋文第333号にて沖縄県教育委員会教育長（以下、県教育長）あてに文化財保護法第99条第1項の規定による発掘調査着手の報告を行い、調査終了後は令和4年12月7日付け埋文第506号にて終了報告を行った。出土遺物は遺物収納コンテナ18箱分が見つかり、令和4年12月8日付け教文第1313号で県教育長より那覇警察署長へ埋蔵文化財発見の通知を行った。

なお、現地作業は南部国道事務所に再委託契約の承認を得た上で、国際文化財株式会社支援業務を委託した。以下、調査の進捗について記す。

令和4年度

- 4月1日 南部国道事務所・沖縄県間で「令和4年度小祿道路（宮城平田原遺跡）埋蔵文化財発掘調査業務」の契約を締結。
- 4月20日 県埋文センター、県文化財課、市文化財課、南部国道事務所、航空自衛隊で現地での調整を行い、調査箇所及び基地内への入城方法、調査区周辺の環境整備、他の工事等の今後の工程計画等について協議。
- 7月10日 南部国道事務所に再委託承認申請書を提出。
- 7月11日 県埋文センターと国際文化財株式会社間で発掘調査支援業務委託契約を締結。
- 7月26日 南部国道事務所、航空自衛隊、県文化財課、県埋文センター、国際文化財株式会社、工事業者で現地調整を行い、調査範囲や工程計画等について協議。
- 8月16日 現地で測量作業を開始。
- 8月18日 磁気探査実施後、重機を用いて調査区の表土掘削を開始（～24日）。
- 8月22日 埋文第333号により発掘調査の着手を県文化財課に報告。市文化財課にも事務連絡。
- 8月24日 機材搬入、電気配線工事を行う（～25日）。
- 9月7日 人力での包含層掘削を開始。
- 9月16日 調査区の遺構検出状況を撮影。撮影後、遺

構掘削を開始。

- 11月16日 調査区の遺構完掘状況を撮影。
- 11月24日 埋戻し作業、現場撤収作業を開始。
- 11月30日 埋戻し完了。写真撮影し現地作業を終了。
- 12月7日 埋文第506号により発掘調査の終了を県文化財課へ報告。市文化財課へ事務連絡。
- 12月8日 教文第1313号により、県教育長から那覇警察署長へ埋蔵文化財の発見について通知を行う。

第4節 資料整理作業の経過

資料整理作業は、令和5年度に遺物の洗浄、注記、分類、接合、実測、写真撮影等を行った。

これらの作業と並行して、原稿執筆や遺構図等のトレースを進め、発掘現場で撮影した写真と併せて報告書全体のレイアウトを完成させた。その後、一般競争入札により印刷業者と契約を行った。

以下、資料整理作業の進捗について記す。

令和5年度

- 4月1日 南部国道事務所と沖縄県間で令和5年度の契約を締結し、記録類の整理、遺物の整理および実測・トレース等の資料整理作業を開始。
- 5月～11月 遺構図のトレース・レイアウト編集、遺物の写真撮影、集計表の作成と並行して原稿執筆、全体のレイアウト編集を実施。
- 12月12日 株式会社 国際印刷と印刷製本業務契約締結。
- 12月21日 入稿

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

宮城平原遺跡は、那覇市宮城小字平田原に所在する。遺跡が所在する那覇市は沖縄本島南部に位置し、北に浦添市、東から南にかけて南風原町、豊見城市と隣接し、西方には東中国海を臨む。市域の東側には首里台地（標高165m）があり、北側には天久台地（標高30～50m）、南側には起伏のある小祿台地（標高30～60m）がある。これらの台地上から西海岸へ安謝川、久茂地川、国場川等が流れ、河川周辺に沖積地を形成し、中央部は標高約10mの低地となっている。

地質は、第三紀中新世の島尻層群を基盤として、第三紀始新世から第四紀洪積世の琉球層群琉球石灰岩及び沖積層（現世サンゴ礁堆積物含む）で形成されている。内陸側では琉球石灰岩がそれらを覆い、さらにその風化土である赤褐色土（島尻マージ）が広がる。また、海側の広地には沖積層が分布する。

宮城は那覇市の南部に所在し、国道331号に面している地域である。海拔10～20mのゆるやかな起伏のある地形となっており、北側に高良、南側に具志が隣接し、両地域の境に位置している。本遺跡を含む宮城一帯の地質は主に沖積層が広がり、宮城北より北西側には島尻層が広がる。

20世紀の初め頃までは、現在の高良と宮城から西側の東シナ海に向かって低地の広がる地域に高宮城村という集落が存在したが、昭和6年（1931年）の小祿飛行場建設の際に、半分近くの土地が接収された。接収された土地は現在、陸上自衛隊那覇駐屯地の一部となっており、本遺跡もその中に所在している。

第2節 歴史的環境

宮城の成り立ちについては諸説あるが、文献を基にくつくつで紹介する。

『豊見城村史』によると、琉球開闢の祖である阿摩弥姑の二代目・南海大神加那志が瀬長島に瀬長集落をつくったが、島には耕作地として利用できる土地が少なかったため、四代目・豊見城大神加那志を使って豊見城グスク周辺の南風原や西原の陸地を開拓させた。この開拓によって瀬長村、豊見城南風原村、西原村の3村ができ、村の人々は海では貝を獲り、陸地では畑を耕して暮らすようになった。

しかし、年々増加する人口に、それまでの食料獲得・生産では村の人々を養うことが難しくなった。そのため、3村の人々は一部住民を残し、新たな土地を求め、その

結果できた地域が現在の豊見城市の根差部、鯨波、高安、長嶺、平良と那覇市の宮城、安次嶺とされている。

さらに、万治2年（1659年）の『毛氏護佐丸直系家譜』に、「豊見城間切萃宮城（グシナーグスク）地頭名」が登場する。地名の由来は、宮城の先祖が具志と宮城の両村の地頭を務めていたからとされている。また「具志」ではなく、牛が鳴くという意味の「萃（犖の略字）」が使われている理由として、当時の宮城は開牛が盛んであったからという俗説が『宮城誌』で紹介されている。

次に延享2年（1745年）の『球陽』の記事によると、延宝元年（1673年）に萃宮城を含む豊見城間切の8村、眞和志間切の3村、新設された4村を合わせて小祿間切が新設された。そのため、享保16年（1731年）の『琉球国日記』と宝暦元年（1751年）の『御当国御高並上納里積記』には「小祿郡 小祿邑 萃宮城」と記載されており、さらに『琉球国惣絵図』（18世紀後半）には「小祿間切 萃宮城村」と描かれていることから、萃宮城の所属が豊見城間切から小祿間切へと移ったことがわかる（図3）。その後、明治36年（1903年）の土地整理事業によって萃宮城村と隣接する高良村が合併して高宮城村になったものの、5年後には「沖縄県及島嶼町村制」が施行され、小祿間切は小祿村になり、高宮城村は小祿村字高宮城となった（図4）。

戦前の字高宮城では、主な産業としてイモやサトウキビを基幹作物とし、他にもキャベツや冬瓜、スイカ、大根などの野菜を栽培していた。特にイモの栽培が盛んだったことから、それに伴った豚の飼育もほとんどの農家で行われていた。また、小祿村ではウルクンジー（小祿紺地）と呼ばれる琉球餅も有名で、村内に7軒しかないスミヤ（染屋）のうち1件が高宮城に所在し、年間700から800反を生産していた。

昭和6年（1931年）に大嶺や鏡水原に小祿飛行場が建設されると、字高宮城の丘陵部に飛行場を守護する高射機関砲陣地も敷設され、民家にも多くの軍隊が駐屯するようになった。しかし、戦況が悪化するると住民は北部への疎開を勧められるようになり、多くの人々が名護町の喜瀬や幸喜に疎開したとされる。戦後は小祿村の半分以上の土地が米軍によって接収されたため、ほとんどの住民が元の家へ戻れなくなった（図5）。

昭和26年（1951年）の土地制度改革により、字高宮城は「字宮城」と「字高良」に分離し、昭和29年（1954年）には小祿村が那覇市に編入され、現在の那覇市宮城という区分になった。昭和47年（1972年）には米軍基地返還協定が結ばれたが、字宮城の大半の土地は自衛隊駐屯地へと移管された。駐屯地として接収されなかった地域は宮城1丁目として、1360人（令和5年11月時点）の人々が現在も生活している（図6）。



図1 沖縄県の位置

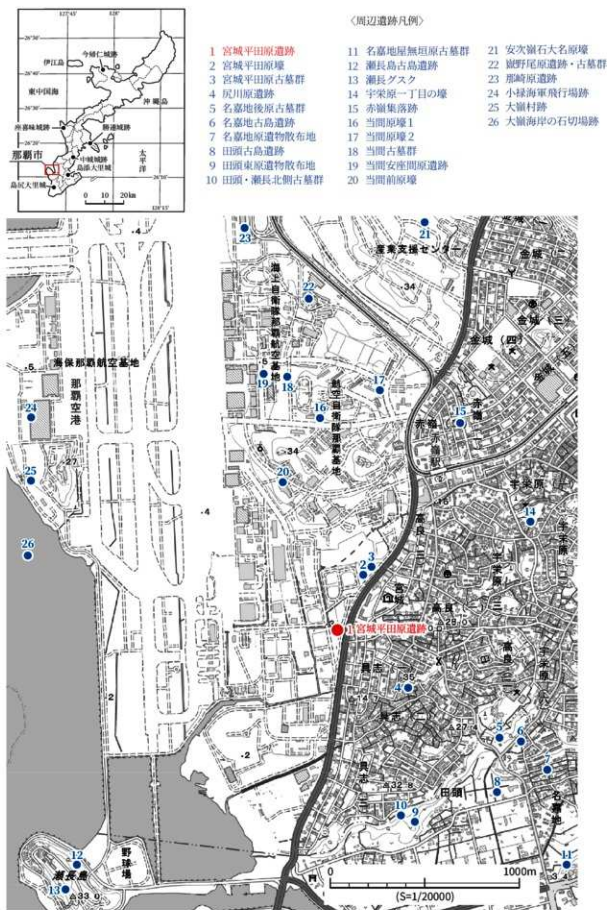




図3 琉球国惣絵図 (○枠は小禄間切高宮城) (沖縄県立図書館所蔵より引用・加筆)

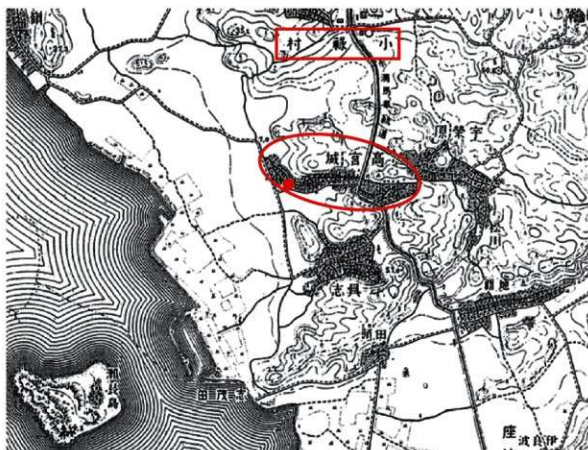


図4 大正8年測量図 (○枠は小禄村字高宮城●は調査区) (今昔マップより引用・加筆)



図5 1945年12月米軍撮影空中写真（○枠は字高宮城●は調査区）（国土地理院 空中写真閲覧サービスより引用・加筆）

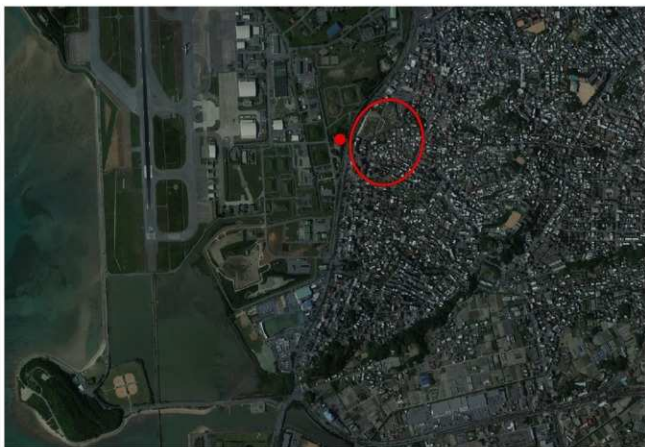


図6 2010年9月国土地理院撮影空中写真（○枠は現在の宮城●は調査区）（国土地理院 地理院地図より引用・加筆）

第3章 発掘調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査区の設定 調査範囲は、那覇空港自動車道（小禄道路）建設設計に伴う工事範囲のうち、市文化財課による試掘調査結果を踏まえ、埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲を特定し調査区を設定した。

調査の工程 調査区設定後、1回目の磁気探査を実施し、確認された異常点を除去後、重機で地表下0.5mまで表土掘削を行った。その後2回目の磁気探査を実施し確認された異常点の除去を行った。

表土掘削後、市文化財課が実施した試掘調査時のトレンチを確認したことから、トレンチ内を地山まで掘削し、堆積層の確認・把握を行った。

堆積層確認後に南西側に表土が残っていたことから、重機による表土掘削を行った。

表土掘削後は、作業員の手作業による包含層掘削と遺構検出を行った。

検出遺構の記録後、遺構掘削は人手による半載あるいは畔を残しながら掘削し、土層堆積状況を記録した後に完掘した。

写真撮影 写真撮影は、各検出面ごとに検出状況の撮影を行い、空中写真についてはデジタルカメラと35mmフィルムカメラによる白黒フィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影した。なお、デジタルカメラの撮影時にはグレーカードを写し込み、RAW現像処理による補正を施している。

実測 発掘調査現場での実測作業については、支援業者である国際文化財株式会社が行い、常駐している県埋文センター職員が現地確認・指示を行った。平面図・断面図は測量機器及び写真測量にて作成した。

整理作業 出土遺物については、注記を行った後に接合作業を実施した。接合作業を経て、掲載遺物の選別、集計作業、実測、デジタルトレース、写真撮影を行った。また、支援業者により作成された遺構等の図面については、イラストレーターを用いて報告書に掲載する縮尺や線の太さ等の修正を行った。

第2節 基本層序

I層：戦後から現代までの造成層、表土、攪乱層。

II層：荒粒シルト～極細粒砂層。しまりはやや悪い。5～10cm大の石灰岩礫を含む。

主に調査区の西側に堆積する。層中からは、主に本土産陶磁器や沖縄産陶器が出土している。

色調や質感から3層に細分できる。当該地は全体的に傾斜しているが、これらの層の境目は平坦で石灰岩礫が水平堆積となっていることから人為的に造成した層と考えられる。

II-1層：荒粒シルト～細粒砂層。しまりは悪い。

白砂や3～5cm大の石灰岩礫を含む。SD1はこの層を掘り込んで構築されている。

II-2層：荒粒シルト～極細粒砂層。しまりはやや悪い。

3～5cm大の石灰岩礫を含む。

II-3層：荒粒シルト～極細粒砂層。しまりはやや悪い。

3～10cm大の石灰岩礫を含む。II-1層の境目に沿って石灰岩礫が散在している。

III層：中粒シルト層。しまりはやや悪い。炭、焼土、石灰岩粒を少量含む。

層中からは主に中国産青花や沖縄産陶器が出土し、色調や質感から4層に細分できる。

近世の造成層及び地表面。

III-1層：中粒シルト層。しまりはやや強い。

SS1はこの層を掘り込んで構築されている。

III-2層：中粒シルト層。しまりはやや悪い。

SD7及びSD8はこの層を掘り込んで構築されている。

III-3層：中粒シルト層。しまりはやや悪い。

SD9及びSD10はこの層を掘り込んで構築されている。

III-4層：中粒シルト層。しまりはやや悪い。

SD13及びSD16はこの層を掘り込んで構築されている。

IV層：砂岩。地山。調査区中央より南西部で確認した。

砂岩が確認された部分が周辺より下がる地形となっている。

V層：灰オリーブ粘土層（クチャ）。地山。調査区の北東部分で確認した。

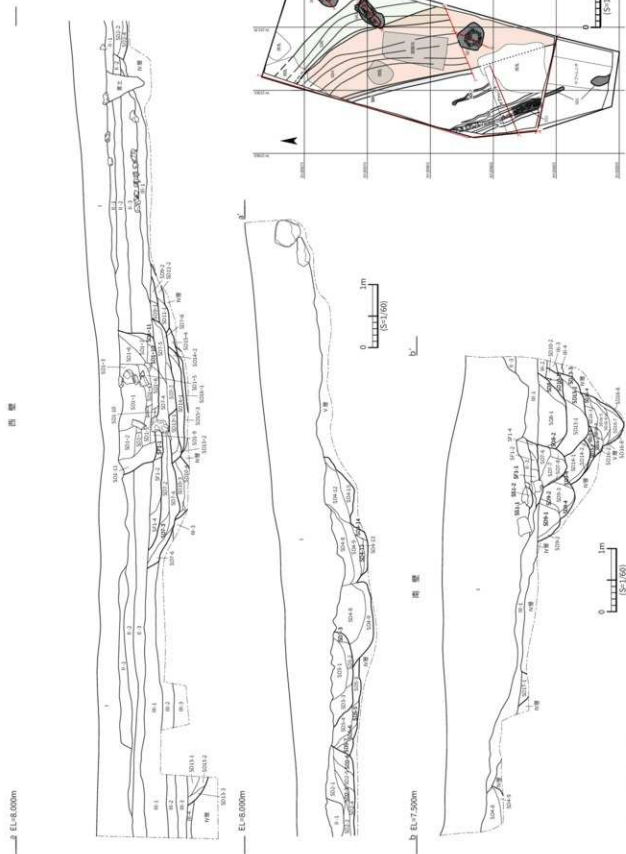


図7 西壁・南壁土層断面図

第3節 遺構と遺物

市文化財課による試掘調査の結果では、多くの貝が堆積する層が報告されていたことから、今回の調査においても貝塚が検出されると想定された。

今回の調査では、1層（攪乱層）を重機により掘削し、1層下より検出された遺構から調査対象とした。その結果、貝の堆積層以外にも遺構が検出された。また、遺跡

は北東から南西にかけて低くなる段状の地形となっている。堆積状況等より近世から近代にかけて南西側の低い部分を北東側の高さに合わせるように造成していることが確認できた。これにより遺構は検出面ごとに時代が異なると考えられるため、検出面別に遺構と遺物を報告する。なお、出土遺物のうち本土産磁器（碗・小碗）と沖縄産施釉陶器（碗・小碗）については、次のとおり分類し、表1及び表2に示した。

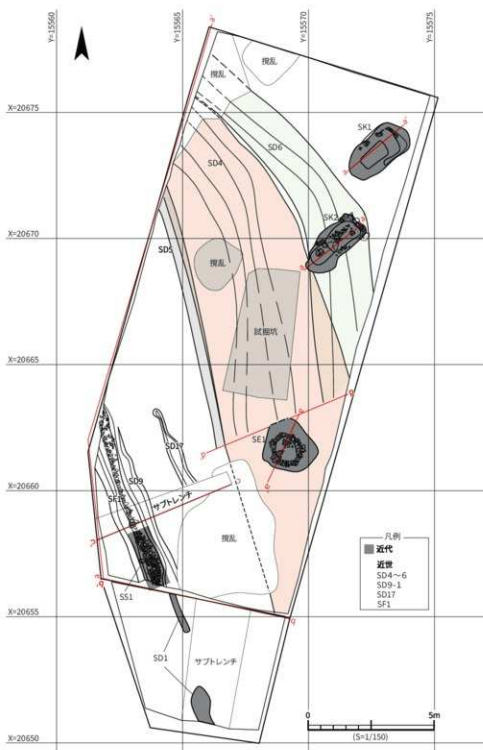


図8 遺構平面図

また、自然遺物については出土した脊椎動物遺体種類一覧を表3に、出土した貝類の生息域については表4に示した。

表1 本土産磁器分類(碗・小碗)

A類	型紙絵付け
B類	刷板絵付け
C類	吹墨
D類	手書き絵付け
E類	クロム青磁

表2 沖繩産施釉陶器分類(碗・小碗)

A類	直口口縁。灰釉甲掛けで胴部以下露胎となるもの。無文。 黒釉(鉄釉)を施釉するもの。施釉方法により3種に細分。
B類	1 黒釉甲掛けで胴部以下露胎となるもの。 2 外面に黒釉。内面に白化粧+透明釉で掛け分けのもの。 3 外面に黒釉。内面に灰釉を掛け分けのもの。 白化粧+透明釉を甲掛けするもの。文様の有無により2種に細分。
C類	1 無文のもの。 2 外面に文様を置くもの。
D類	透明釉を施釉するもの。

1 第1検出面(近代)

第1検出面の遺構は、方形石組遺構(SK1, 2)、井戸跡(SE1)、溝状遺構(SD1)、石敷遺構(SS1)を検出した。遺構の詳細と関係については各遺構の記述で述べる。

方形石組遺構(SK1) 遺構は調査区の北東に位置する。規模は長軸が2.78m、短軸が1.31mで北東-南西を軸としている。覆土は灰オリブ荒粒シルト～極細砂粒で

表3 脊椎動物遺体種類一覧

軟骨魚類	CHONDRICHTHYES
サメ類	Lamniformes
硬骨魚類	OSTEICHTHYES
ハタ科	Serranidae
爬虫類	REPTILIA
ウツコガモ科	Colapidae
哺乳類	MAMMALIA
ネコ	Felis catus
ウマ	Equus ferus
ウシ/ウマ	Bos taurus / Equus ferus
ブタ	Sus scrofa domestica
イノシシ/ブタ	Sus scrofa / S. s. domestica
ウシ	Bos taurus

表4 貝類の生息場所類型

大区分		遺骨等
I	外洋-マングローブ	a 石礫
II	内海-石灰質	b 化石
III	河口干潟-マングローブ域	c 砂/泥
IV	淡水域	d 河川礫底
V	陸域	f 積物上
VI	その他	

小区分	
0	灌漑帯上部
1	I-0ノッチ
2	II-0マングローブ
1	灌漑帯中・下部
2	遊樂帯上部
1	I-2イノー内
3	干瀬
4	礫斜面
5	止水
6	淡水
7	林内
8	林内・林縁部
9	林縁部
10	海浜部
11	打ち上げ物
12	化石

土の色調や質感で3層に細分できる。遺構の北東部分では内側に面を持つ石灰岩礫の石組を確認した。残存する石組以外の部分は造成により消失したが、あるいは当初からこの状態であったかは不明であるが、後述するSK2と形状が類似し同時期のものと考えられることから、同様の石組が数基存在したと想定される。また、調査時は1～3層以下も遺構の覆土と考えていたが、周辺の地質やSK2の検出状況から地山と判断した。遺物は出土しなかった。

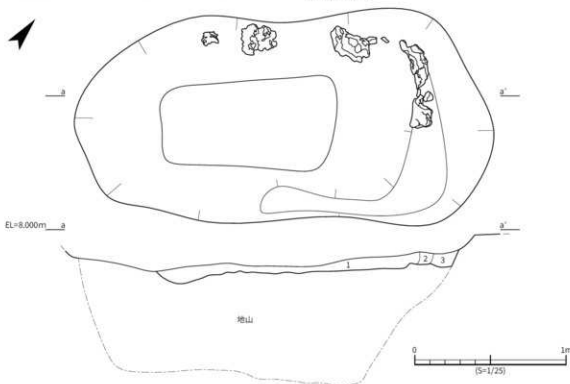


図9 SK1平面・土層断面図

方形石組遺構（SK 2） 遺構は調査区の北東部分、SK 1の南側に位置する。規模は長軸が2.74m、短軸が1.19m、深さ0.42mで、北東-南西を軸としている。覆土は灰オリーブ荒粒シルト～極細粒砂で土の色調や質感で16層に細分できる。遺構はSD 4及びSD 6を掘り込んで構築されている。遺構の北東部分ではSK 1と同様に内側に面を持つ石灰岩礫の石組を確認した。また、遺構の南西部分では東西軸を持つ段状の石組と、石組の内側に敷石を確認した。石組の下層ではラミナがみられ、また複数回掘り返したと考えられる堆積が確認できた。

遺物は中国産白磁、中国産青花、本土産磁器、沖縄産陶器、陶質土器、瓦質土器、石製品が出土した。図化を行った7点の遺物の詳細は表5に記載する。



SK 2 検出状況 北から



SK 2 半載状況 北西から



SK 2 完掘状況 北西から

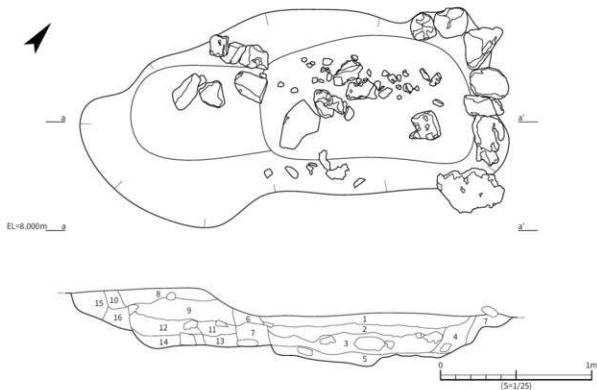


図10 SK 2 平面・土層断面図

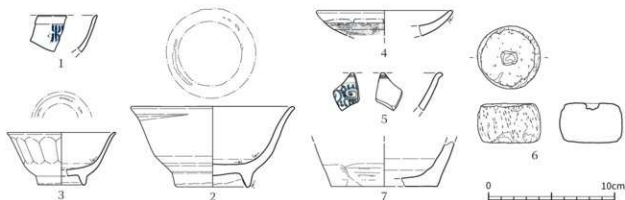


図11 SK 2出土遺物 (S=1/3)

表5 SK 2出土遺物観察一覧

番号	種類	器種	分類	部位	法量(単位: cm) ()は復元値			観察事項	出土地
					口径	器高	高台径		
1	本土産磁器	小碗	D	口縁部	-	-	-	素地は灰白色で彫刻。釉は灰白色で内外面施釉。外面に染色体状の文様を施す。明治〜大正時代。	1層
2	沖縄産胎土陶器	碗	C-1	口〜底部	(13.0)	6.4	6.6	素地は浅黄褐色を呈する。両面に白化粧と透明釉を施釉。外反口縁。内底は乾の目輪跡が。裏付は輪状とし、白土を塗布する。	1層
3	沖縄産胎土陶器	小碗	C-1	口〜底部	(8.6)	4.2	(4.1)	素地は灰白色を呈する。両面に白化粧と透明釉を施釉し。貫入が入る。内底は乾の目輪跡が。裏付は輪状とし、白土を塗布する。	2層
4	沖縄産胎土陶器	灯明皿	-	口縁部	(10.8)	-	-	素地は浅黄褐色を呈する。外面に口縁部に鉄粒。内面に白化粧と透明釉を施釉する。外面に使用時のものとみられる程が残る。	2層
5	中国産青花	碗	-	口縁部	-	-	-	素地は灰白色を呈する。両面に青白色の透明釉を施釉。口唇は外反する。口縁内面と外面に黒線を施す。唐草文を施す。福建・広東系。	3層
6	石製品	石鏢	-	-	最大径 5.0	3.15	孔径 1.3	切り出したサンゴ石を加工したもので、上面と前面は研磨され、上面の中心には穿孔された痕がみられる。形状から鏢と推定されるが、明確な用途は不明。重量62.0g。	3層
7	陶質土器	壺	-	底部	-	-	-	素地は褐色を呈する。裏面、赤色粒、白色粒が混入。内面は輪状物があり、外面は裏面調整痕と種子の圧痕とみられるものあり。	13層

溝状遺構 (SD 1) 遺構は調査区の西壁及び南側で確認した。規模は残存幅 2.24m、深さ 0.6m で、戦後の造成により攪乱を受けているため南側でのみ遺構の平面を確認できた。遺構はII層を掘り込んで構築されて

いる。また、覆土にはラミナがみられ、戦前の航空写真や地図によると当該地に遺跡が存在していたことが窺えることから遺構は道路に伴う排水用の溝であったと考えられる。遺物は確認できなかった。

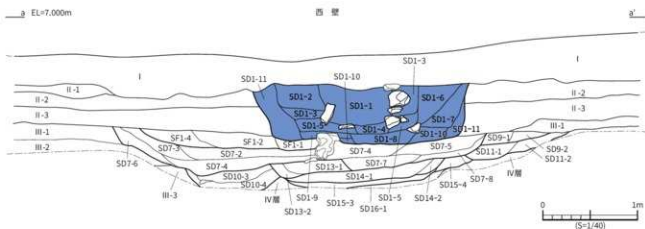


図12 SD 1土層断面図

井戸跡 (SE 1) 遺構は調査区の南東、SK 2 の南側に位置する。規模は最大径 2.25m で、SD 4 及び V 層を掘り込んで構築されている。10 ~ 30cm 大の石灰岩切石が積まれており、石の大きさは上部に向かって小さくなる。1層からは現代の遺物が確認されていることから近代に造築され、戦後のある時期まで埋められず現存していたと考えられる。

井戸の掘り込み部には、裏込めの土に SD 4 の覆土も混在していることから、井戸を掘った際に生じた土を裏込めに使用していることがわかる。調査は地表下約 1.7m まで掘削したところで、石積みの崩落の危険があったことから掘削を中止し記録を行った。遺物は出土しなかった。

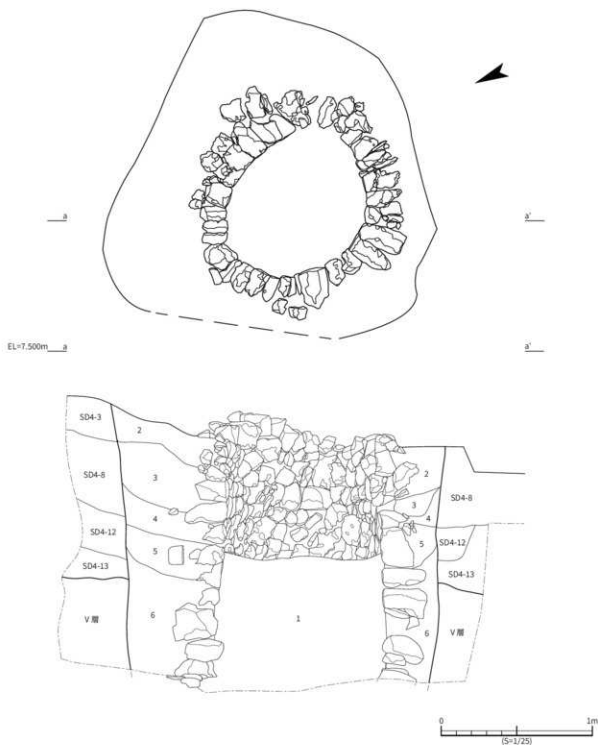


図 13 SE 1 平面・土層断面図

石敷遺構 (SS 1) 遺構は調査区の南に位置する。規模は長軸が2.3m、短軸が0.55mで、北西-東南を軸としている。覆土は灰オリーブ荒粒シルト~極細粒砂で土の色調や質感で2層に分けられる。II - 3層上面で検出した。遺構は10~30cm大の石灰岩礫を配置しており、上面の石材は角が無くなめらかに整えられている。第2検出面のSF 1と軸の方向や検出時の高さが同じであったことから、当初は同時期の遺構と考えていた。しかし、調査の結果、SF 1はII - 3層に掘り込まれていたことから、時期が異なるものと推測される。遺物は、中国産青花、沖縄産陶器、陶質土器、瓦質土器が出土している。図化を行った遺物の詳細は表6に記載する。

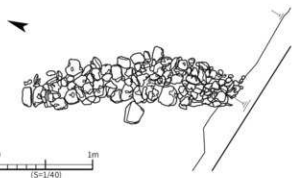


図14 SS 1平面図

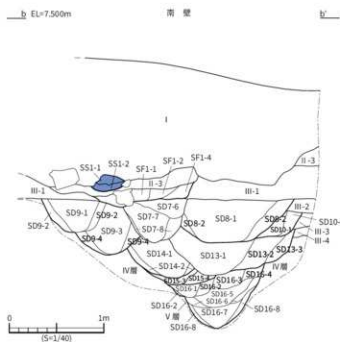


図15 SS 1土層断面図



SS 1検出状況① 南から



SS 1検出状況② 南西から



SS 1完掘状況 南から



SS 1土層断面 北から

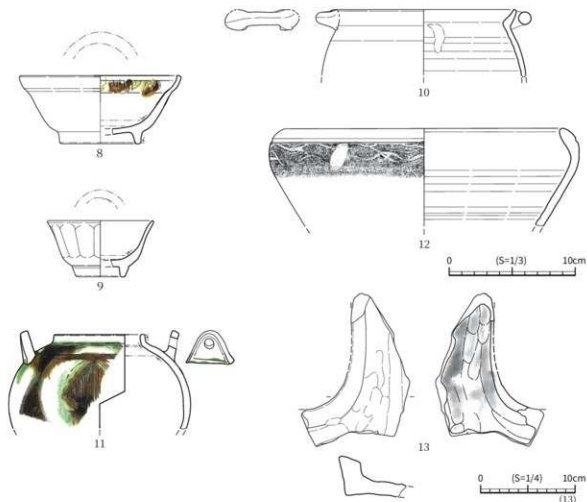


図 16 SS 1 出土遺物

表 6 SS 1 出土遺物観察一覧

番号	種類	器種	分類	部位	法量(単位: cm) ()は復元値			観察事項	出土地
					口径	器高	高台径		
8	沖縄産施軸陶器	碗	C-2	口~底部	(12.8)	5.4	(6.7)	素地は淡黄色を呈する。両面に白化粧と透明釉を施軸。線彫りで葉文を描き、胎軸と緑軸を施軸。内底と畳付を軸割ぎし、内底は蛇の目軸割ぎ。	2層
9	沖縄産施軸陶器	小碗	C-1	口~底部	(8.4)	4.45	(4.5)	素地は淡黄色を呈する。両面に白化粧と透明釉を施軸し、細かい買入が入る。内底は蛇の目軸割ぎ。畳付は軸割ぎし、白土を塗布する。	2層
10	沖縄産施軸陶器	鍋	—	口縁部	(14.7)	—	—	素地は浅黄褐色を呈する。内面は露体、外面に緑軸を施軸する。胴部に把手あり。	2層
11	沖縄産施軸陶器	急須	—	口縁部	(7.2)	—	—	素地は浅黄褐色を呈する。両面に白化粧を施し、外面に透明釉を施軸する。また、外面頸部には2条の細線を巡らせ、胴部には線彫りで幾何学模様を描いたものに胎軸と緑軸を施軸する。把手の接合部の内側に青軸がかかる。	2層
12	陶質土器	水鉢	—	口縁部	(21.8)	—	—	素地は褐色を呈する。雲母、赤色粒、白色粒が混入。舌状に内湾する口縁部に1条の沈線を巡らせ、その下に柳間きによる波状文を描く。両面に煤が付着する。	2層
13	瓦質土器	火鉢	—	口縁部	—	—	—	素地は褐色を呈する。雲母、白色粒が混入。内面には煤が付着する。口縁部の厚みは2cm、胴部の器厚は1.2cm。	2層

2 第2検出面(近世)

第2検出面の遺構は、溝状遺構(SD 2~17)及び道跡(SF 1)を確認した。遺構の詳細については各遺構の項で述べる。

道跡(SF 1) 遺構は調査区の南西部分で確認した。北西-南東を長軸とし、西壁及び南壁の外まで広がっている。覆土は灰オリーブ荒粒シルト~極細粒砂で土の色調や質感で5層に細分できる。遺構はⅢ-1層を掘り込んで作られており、南側はSS 1に切られている。石列や堆積状況、SD 1と軸や遺構のラインが揃うことから道跡と考えられるが、石列の直上はSD 1に、東側はⅡ-3層及びⅠ層により切られていたことから路面等は確認できなかった。遺物は中国産青花、沖縄産陶器、陶質土

器、簀が出土している。図化を行った遺物の詳細は表7に記載する。



SF 1検出状況 南西より

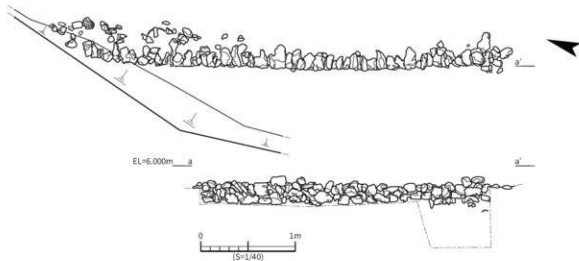


図17 SF 1平面・立面図

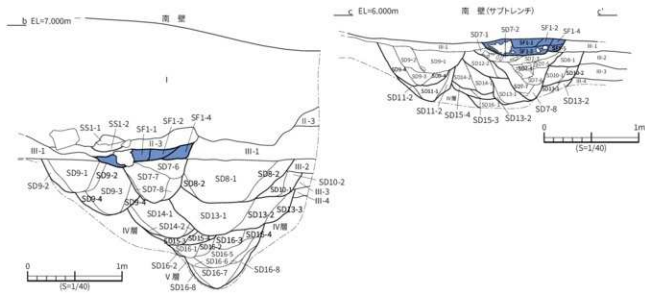


図18 SF 1土層断面図

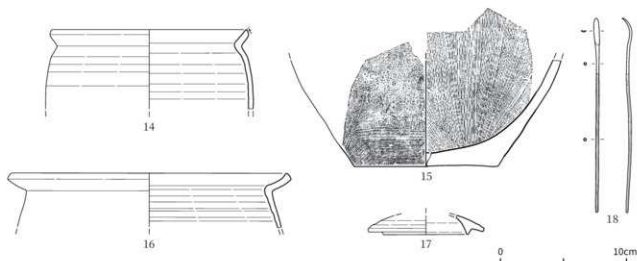


図19 SF 1 出土遺物 (S=1/3)

表7 SF 1 出土遺物観察一覧

番号	種類	器種	分類	部位	法量(単位:cm) (又は復元値) 口径 器高 高台径	観察事項	出土地
14	沖縄産無軸陶器	罎	-	口縁部	(15.7) - -	素地はふい棕色を呈する。外面の途中まで灰黄褐色～黒褐色の軸を施輪。内面は一部にふい黄褐色軸がかかる。両面ともに轆轤による成形痕が明瞭。	4層
15	沖縄産無軸陶器	頸鉢	-	底径	- - (11.4)	素地は棕色を呈する。外面に成形時のものとみられる凹凸痕と調整痕が残り、煤が付着する。内底の網目は密。	4層
16	陶質土器	罎	-	口縁部	(22.4) - -	素地は棕色を呈する。口縁部は「く」の字状で蓋受けとなる。口唇断面方形。胴部に煤付着。	4層
17	陶質土器	蓋	-	底径	- 内径 (7.2) (9.2)	素地は棕色を呈し、雲母と赤色鉄を含む。内面に煤(付)着。	4層
18	青銅製品	簪	-	全長	カブ(a) カブ(b) 耳掻き状を呈する。頸部の断面は円形、平部の断面は六角形。女性用の刺差(刺簪)。重量	3.5g	4層

溝状遺構 (SD 2・3) SD 2 および SD 3 は調査区の中央部西壁で確認した。戦後の攪乱により平面では確認することができなかった。覆土は灰オリブ荒粒シルト～極細粒砂で土の色調や質感で、SD 2 は 6 層、SD 3 は 3 層に細分できる。遺構は後述する SD 4・5・6 と同様に北西-南東を軸とする区画境界に伴う溝と考えられる。遺物は出土しなかった。

溝状遺構 (SD 4) 遺構は調査区の中央で確認した。規模は残存幅 5.48m、深さは最大 1.44m である。覆土は灰オリブ荒粒シルト～極細粒砂で土の色調や質感で 15 層に細分できる。遺構は南壁東側から西壁北側まで伸びており、南側では北西-南東に軸を持つが、調査区中央部で西側に屈曲し、北側では西-東に軸を持つようになる。これは傾斜する地形に沿って構築されたためと考えられる。遺構は北から南に傾斜し、覆土は数回にわたり人為的に溜ったような堆積をしており、ラミナがみられた。遺構がある箇所は東側が西側よりも 1m 程低い地形となっており、また、遺構の深い部分は西側の地山よりも低くなっている。このことから本遺構は、北東か

ら西側へ流れる水を南へ逃がすための溝であったと考えられる。

遺物は、中国産青花、沖縄産陶器が出土している。また遺構の 3 層及び 9 層、11～12 層からは、本遺跡出土の遺物の大半を占める自然遺物が出土している。SD 4 から出土した脊椎動物遺体の 9 割を占めるのは、イノシシ/ブタの骨となっている。イノシシ/ブタの骨は、ほとんどの遺構からの出土を確認しているが、特に SD 4 からの出土量は突出している。この他にもウシ/ウマ、ブタ、リュウキュウイノシシと特定できる獣骨も得られている。これらの骨にはカットマークや叩き割りの痕など、人の手加わった痕跡が確認された。また、イノシシ/ブタの骨には、四肢骨の骨端が未癒合であるものや、未萌出の歯がついた下顎骨が得られていることなどから、比較的若い個体が存在していたことも判明している。

また、ブタの骨についてはその特徴が近代期のものと類似しているため、遺構は近代の初めまで利用されていた可能性がある。

さらに、脊椎動物遺体の出土量を遙かに上回る量の貝類遺体も遺構から出土している。貝類遺体は大きく二枚

貝と巻貝に分けることができ、二枚貝の方が多く確認された。二枚貝のなかでも、リュウキュウシラトリの出土量が目立ち、他にもウラキツキガイやリュウキュウサルボオなども多く確認した。これらの獣骨や貝は食料残渣であると考えられ、遺構が機能していた際に廃棄されていたものと推測される。

溝状遺構 (SD 5) SD 4の南側を並行する溝状遺構で、調査区中央で確認した。規模は残存幅1.5m、深さは最大0.52mである。覆土は灰オリーブ荒粒シルト～極細粒砂で土の色調や質感で7層に細分できる。遺構は東側をSD 4に切られており、また西側はSD 3に切られている。覆土にラミナが確認できたことからSD 4が構築される前の排水や区画に伴う遺構と考えられる。遺物は出土しなかった。

溝状遺構 (SD 6) SD 6はSD 4の北側に並行する溝状遺構で、調査区の北側で確認した。規模は残存幅1.2m、深さは最大0.5mである。覆土は灰オリーブ荒粒シルト～極細粒砂で土の色調や質感で9層に細分できる。SD 4に切られており、V層を掘り込んで構築されている。SD 5同様、覆土にラミナが見られることから、SD 4が構築される前の排水や区画に伴う遺構と考えられる。遺物は出土しなかった。

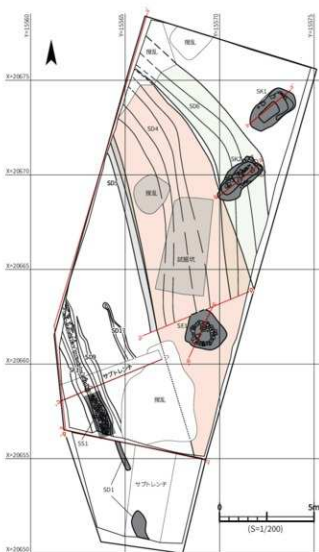


図20 SD 4～6 遺構平面図

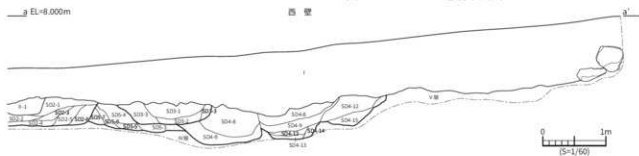


図21 SD 2～5 土層断面図

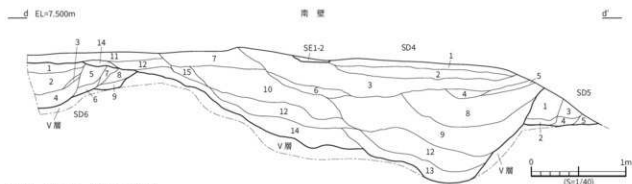


図22 SD 4～6 土層断面図

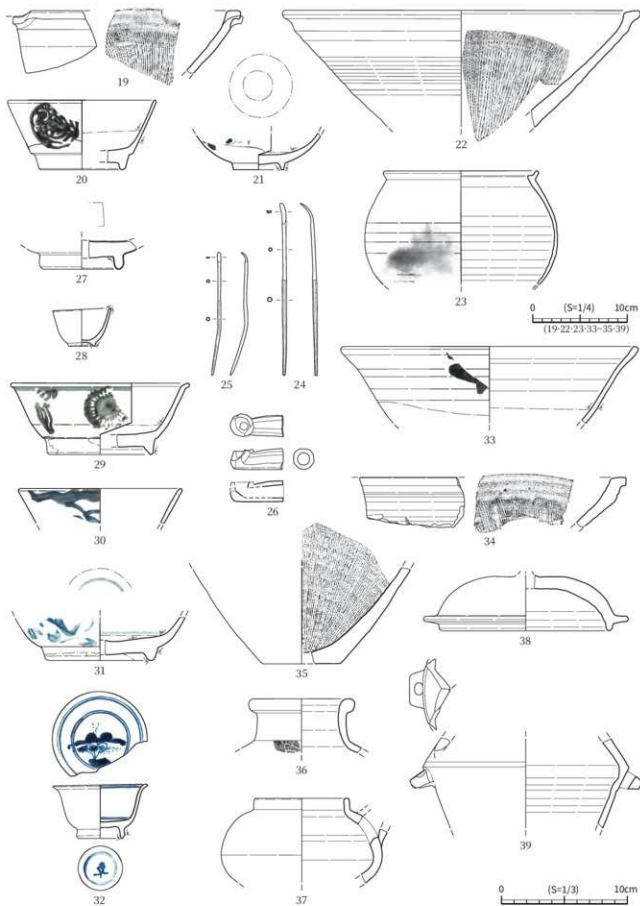


図23 SD 4出土遺物

表8 SD 4 出土遺物観察一覧

番号	種類	器種	分類	部位	法量(単位:cm)は復元値			観察事項	出土地
					口径	器高	高台径		
19	沖縄産無軸陶器	楕鉢	—	口縁部	—	—	—	素地は棕色を呈する。口縁部は外側に開きをもち、口唇を平坦にしている。内面の楕目は密で、煤(?)が付着。	2層
20	中国産青花	碗	—	口~底部	(11.8)	5.5	(7.6)	素地は淡灰白色を呈する。両面に透明釉を施す。外周に灰色の瓦須で龍丸文をスタンプで施す。福建・広東系。	3層
21	本土産染付	碗	—	底部	—	—	4.2	素地は灰白色を呈する。両面に透明釉を施し、瓦須で梅文を描く。見込みは蛇の目輪割ぎ。墨付は輪割ぎ。	3層
22	沖縄産無軸陶器	楕鉢	—	口縁部	(38.0)	—	—	素地は赤褐色を呈する。外面の轆轤痕が明瞭。内底の楕目は密。	3層
23	陶質土器	罎	—	口縁部	(16.4)	—	—	素地は棕色を呈し、雲母や赤色粒を含む。外面胴部に煤が付着。	3層
24	青銅製品	簪	—	—	全長 13.7	カブ(a) 0.35	カブ(b) 1.7	耳掻き状を呈する。頸部の断面は円形、茎部から竿部の断面は六角形を呈する。竿部の先端は破損。女性用の例。重量7.8g。	9層
25	青銅製品	簪	—	—	全長 9.8	カブ(a) 0.3	カブ(b) 0.8	耳掻き状を呈する。頭から竿の断面は円形を呈する。男性用の例。重量3.2g。	9層
26	地質	—	—	雁首	—	—	—	素地は赤褐色を呈する。雁首の左側にサンゴ目と思われる石灰が付着する。小口の断面は八角形で、内径1.65cm。沖縄産無軸陶器。	11層
27	中国産青磁	碗	—	底部	—	—	(6.7)	素地は淡棕色を呈する。両面に灰オリーブ色の釉を施す。全体的に細かい貫入が入る。高台内を輪割ぎ。	12層
28	中国産白磁	小杯	—	口~底部	4.6	高3.0 低2.8	2.3	直口口縁。素地は白色。全面に明るい青白色の釉を施す。墨付を輪割ぎし、砂目が付着する。	12層
29	中国産青花	碗	—	口~底部	(14.2)	5.65	(8.8)	素地は淡灰白色を呈する。両面に透明釉を施す。外周に灰色の瓦須で菊花文と唐草文をスタンプで施す。福建・広東系。	12層
30	中国産青花	碗	—	口縁部	(13.0)	—	—	素地は淡灰白色を呈する。両面に透明釉を施す。外面の口縁部下に草花文を描く。全体的に細かい貫入が入る。福建・広東系。	12層
31	中国産青花	碗	—	底部	—	—	(9.4)	素地は淡灰白色を呈する。両面に透明釉を施す。外面に草花文とみられる文様を描く。見込みと墨付は輪割ぎ。輪割ぎした見込みの外側と内側に圈線を巡らせる。福建・広東系。	12層
32	中国産釉染付	小碗	—	口~底部	7.5	4.3	底径 3.5	素地は淡灰白色を呈し堅緻。外面に褐色の釉を施す。口唇から内面は透明釉を施す。内部の口縁部下と見込みに2条の圈線を巡らせる。見込みに風景を描く。内底に2条の圈線と紋あり。	12層
33	沖縄産無軸陶器	鉢	—	口縁部	(31.6)	—	—	素地は灰白色を呈する。両面の腰の腹りまで灰オリーブ色の釉を施す。外面胴部に鉄絵あり。	12層
34	沖縄産無軸陶器	楕鉢	—	口縁部	—	—	—	素地はふい赤褐色を呈し、赤色粒を含む。口縁部は逆J字型の形状を呈し、下部に圈線を巡らせる。胴部の轆轤形成痕は明瞭。内面の楕目は密。	12層
35	沖縄産無軸陶器	楕鉢	—	底部	—	—	底径 (8.2)	素地は棕色を呈し、赤色粒を多く含む。胴部に煤(?)付着。内面の楕目は密。	12層
36	沖縄産無軸陶器	壺	—	口縁部	(8.4)	—	—	素地は灰白色を呈する。口縁部は玉縁状。外面に暗赤褐色の釉を施す。胴部にわずかに刻印と考えられる線彫りが残る。	12層
37	沖縄産無軸陶器	急須	—	口縁部	(7.4)	—	—	素地はふい赤褐色を呈する。口唇断面方形。注口基部がわずかに残存。外面には煤と石灰が付着。	12層
38	沖縄産無軸陶器	蓋	—	底径 (16.2)	—	—	口径 (13.7)	素地は赤褐色を呈する。外面に浅黄色の自然釉を施す。	12層
39	陶質土器	火炉	—	胴部	最大制径 (21.7)	—	—	素地は棕色を呈し、赤色粒を含む。把手周辺に貼付時の指圧痕が残る。内部にわずかに煤が付着。	12層

溝状遺構 SD 7～16は調査区の南西側で確認した溝状遺構である。遺構の特徴としては覆土にラミナが見られ、北から南にかけて傾斜していることから排水に関する遺構と考えられる。調査当初は同一の遺構と考えていたが、西壁でⅢ層が3枚に分層でき、各遺構の切り合い状況が確認できたことから、これらの遺構は造成に伴うものと考えられる。各遺構の詳細は以下のとおりとなる。

溝状遺構 (SD 7) 遺構の規模は残存幅3.95m、深さ0.44mで、覆土は灰オリーブ荒粒シルト～極細粒砂で土の色調や質感で8層に細分できる。北西-南東を軸としており、調査区の西及び南側へ続いている。Ⅲ-2層の上面でSF 1の下層で検出した。5層から3～5cm大の石灰岩礫が多く出土している。遺物は沖縄産無釉陶器が1点出土している。

溝状遺構 (SD 8) 遺構の規模は残存幅1.1m、深さ0.45mで北東-南西を軸としており、調査区の西及び南側へ続いている。覆土は灰オリーブ荒粒シルト～極細粒砂で土の色調や質感で2層に分けられる。Ⅲ-1層に切られ、Ⅲ-2層を掘り込み構築されている。遺物は中国産白磁、中国産青花、沖縄産陶器が出土している。図化を行った遺物の詳細は、表9に記載する。

溝状遺構 (SD 9) 遺構の規模は残存幅1.08m、深さ0.56mで北西-南東を軸としており、調査区の西及び南側へ続いている。覆土は灰オリーブ荒粒シルト～極細粒砂で土の色調や質感で4層に分けられる。Ⅲ-2層を掘り込んで構築されている。遺物は中国産白磁、中国産青花、本土産磁器、沖縄産陶器、陶質土器、青銅が出土している。図化を行った遺物の詳細は、表9に記載する。

溝状遺構 (SD10) 遺構の規模は残存幅1m、深さ0.26mで北西-南東を軸としており、調査区の西及び南側へ続いている。覆土は灰オリーブ荒粒シルト～極細粒砂で土の色調や質感で4層に分けられる。Ⅲ-3層を掘り込む。遺物は出土しなかった。

溝状遺構 (SD11) 遺構の規模は残存幅1.12m、深さ0.44mで北西-南東を軸としており、調査区の西及び南側へ続いている。覆土は灰オリーブ荒粒シルト～極細粒砂で土の色調や質感で2層に分けられる。遺物は出土しなかった。

溝状遺構 (SD12) 遺構の規模は残存幅0.48m、深さ0.28mである。サブレンチ断面にて確認した。覆土は灰オリーブ荒粒シルト～極細粒砂で土の色調や質感で2層に分けられる。Ⅲ-3層を掘り込んで構築されており3～5cm大の石灰岩礫が混じる。遺物は沖縄産陶器と陶質土器が出土している。

溝状遺構 (SD13) 遺構の規模は残存幅1.3m、深さ0.5mで北西-南東を軸としており、調査区の西及び南側へ続いている。覆土は灰オリーブ荒粒シルト～極細粒砂で土の色調や質感で3層に分けられる。Ⅲ-4層を掘り込む。遺物は中国産青花と沖縄産陶器が出土している。

溝状遺構 (SD14) 遺構の規模は残存幅1.75m、深さ0.4mで北西-南東を軸としており、調査区の西及び南側へ続いている。覆土は灰オリーブ荒粒シルト～極細粒砂で土の色調や質感で2層に分けられる。遺物は出土しなかった。

溝状遺構 (SD15) 遺構の規模は残存幅2m、深さ0.3mで北西-南東を軸としており、調査区の西及び南側へ続いている。覆土は灰オリーブ荒粒シルト～極細粒砂で土の色調や質感で4層に分けられる。Ⅳ層を掘り込んで構築されている。遺物は出土しなかった。

溝状遺構 (SD16) 遺構の規模は残存幅0.94m、深さ0.68mで北西-南東を軸としており、調査区の西及び

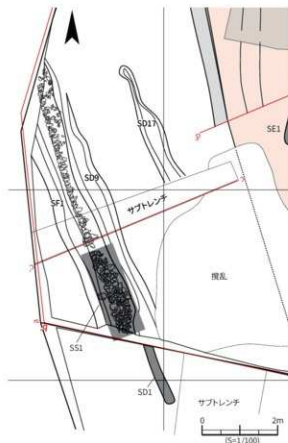


図24 SD 9・17 遺構平面図

南側へ続いている。覆土は灰オリブ荒粒シルト～極細粒砂で土の色調や質感で7層に細分できる。IV層及びV

層を掘り込む。遺物は中国産青花や沖縄産陶器、陶質土器、瓦が出土している。

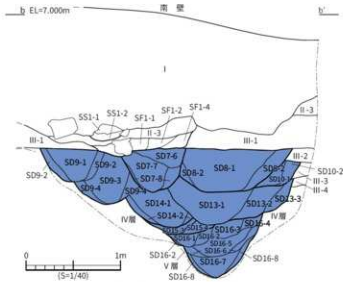


図25 SD 7～16 土層断面図

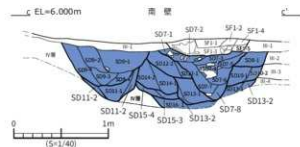


図26 SD 7～16 サブトレッチ土層断面図

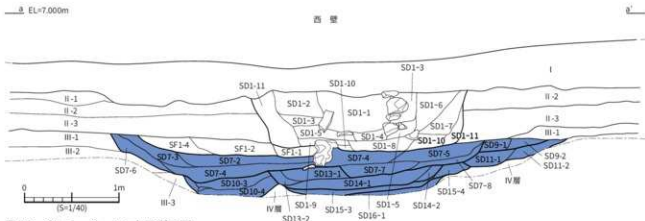


図27 SD 7・9～16 土層断面図



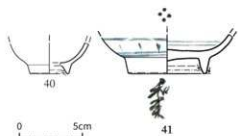


図28 SD 8 出土遺物 (S=1/3)

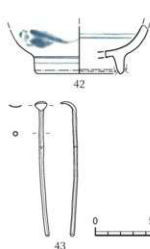


図29 SD 9 出土遺物 (S=1/3)

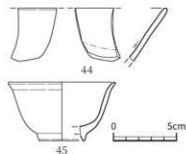


図30 SD12 出土遺物 (S=1/3)

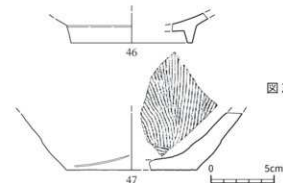


図31 SD13 出土遺物 (S=1/3)

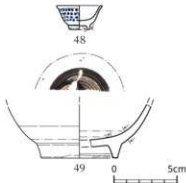


図32 SD16 出土遺物 (S=1/3)

表9 SD 8、9、12、13、16 出土遺物観察一覧

番号	種類	器種	分類	部位	法量(単位:cm) (は復元値)	口径	壁厚	高台径	観察事項	出土地
40	中国産白磁	小碗	—	底部	—	—	—	(3.5)	素地は淡青白色で卑緻。全体に透明釉を施輪後、費付と内底を輪削す。	SD8-1
41	中国産青花	碗	—	底部	—	—	—	(6.8)	素地は淡青白色で卑緻。全体に透明釉を施輪後、費付を輪削す。見込みに2葉の團扇と丸を4点配付けする。外面の團扇に團扇で枕巾蓮弁文を描く。積化黒系。	SD8-1
42	中国産青花	碗	—	底部	—	—	—	(7.2)	素地は淡青白色で卑緻。全体に透明釉を施輪後、費付を輪削す。見込みに高台に2葉の團扇を施す。外面に草花文あり。福建・広東系。	SD9-3
43	青銅製品	簪	—	—	全長	カブ(a)	カブ(b)	10.65 1.0 0.75	耳掻き状を呈する。頸部から竿部までの断面は六角形。重量6.0g。	SD9-4
44	沖繩産施釉陶器	碗	A	口縁部	—	—	—	—	素地は灰白色を呈する。外面は全面、内面は途中まで辰輪を施輪。	SD12-2
45	沖繩産施釉陶器	小碗	C-1	口~底部	(8.5)	4.65	(4.0)	—	素地は黄灰色を呈する。全面に白化粧と透明釉を施し、費付を輪削す。見込みに若干後黄色の釉がかかる。外面の團扇を除き、貫入が入る。	SD12-2
46	沖繩産施釉陶器	碗	A	底部	—	—	—	(10.2)	素地はにぶい黄褐色を呈す。團扇による成形痕が明確。	SD13-1
47	沖繩産施釉陶器	鉢鉢	—	底部	—	—	—	(10.4)	橙色の素地に黒色の土が混入。外面に輪轆痕と指圧痕あり。内面の轆目は並。	SD13-1
48	中国産青花	小杯	—	口~底部	(3.6)	1.9	(1.8)	—	素地は淡青白色で卑緻。全体に透明釉を施輪後、費付を輪削す。口縁部外面と高台輪に團扇を施らせる。外面に団扇の輪と竹皮文を描く。積化黒系。	SD16-5
49	沖繩産施釉陶器	碗	A	底部	—	—	—	(6.8)	素地は黄灰色を呈する。胴部まで辰輪を施輪。見込みを輪削す。胴縁で文様を施す。	SD16-5

溝状遺構 (SD17) 遺構は調査区の南西側で検出した。北西-南東を軸としており、調査区の西及び南側へ続いている。遺構はSD 7~16と並行にIV層を掘り込ん

で構築されている。遺物は沖繩産施釉陶器が出土している。



図33 SD17 サブトレンチ土層断面図

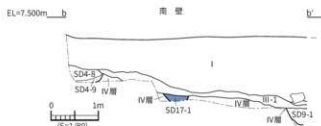


図34 SD17 土層断面図

第4節 遺構以外からの出土遺物

遺構以外からの遺物としては、I層からは212点、II-3層からは139点出土している。II-3層からは

中国産青花、本土産磁器、沖縄産陶器、陶質土器、瓦質土器、瓦、簪が出土しており、特に沖縄産陶器が106点と多く出土している。

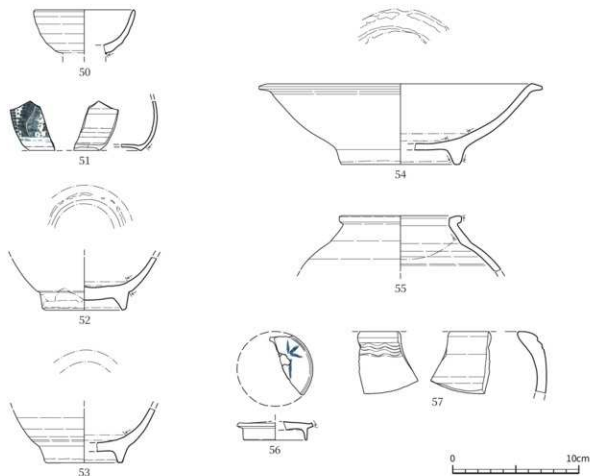


図35 II-3層出土遺物(S=1/3)

表10 II-3層出土遺物観察一覧

番号	種類	器種	分類	部位	法量(単位:cm) ()は復元値 口径 器高 高台径	観察事項	出土地
50	本土産磁器	小碗	E	口縁部	(8.0) — —	素地は白色で緻密。両面に緑釉を施釉。外面は轆轤成形による稜がついており、内面は無文。	II-3層
51	本土産磁器	急須	—	底部	— — —	素地は灰白色を呈する。外面は底部近くまで、内面は全面施釉。外面に刷板転写による波濤文のような青色の文様を施す。	II-3層
52	沖縄産陶器	碗	B-3	底部	— — (7.0)	素地は灰白色を呈する。外面に黒褐色、内面に灰オリーブ色を呈する釉を施釉。見込みは蛇の目軸割ぎをしており、重ね焼きの目痕が残る。	II-3層
53	沖縄産陶器	碗	C-1	底部	— — (7.2)	素地は暗灰黄色を呈する。両面に白化粧を施釉するが、透明釉はかからない。見込みは蛇の目軸割ぎ。磨付は露胎。	II-3層
54	沖縄産陶器	鉢	—	口~底部	(22.4) 6.4 (10.2)	素地は灰白色を呈する。外面に黒褐色、内面に透明釉を施釉。見込みに重ね焼きの目痕が残る。	II-3層
55	沖縄産陶器	皿	—	口縁部	(9.7) — —	素地は灰白色を呈する。外面は全面、内面は途中まで黒褐色の釉を施釉。口唇に白化粧を施す。	II-3層
56	沖縄産陶器	蓋	—	直径	(6.0) — 特径	素地は灰白色を呈する。蓋の上面のみ透明釉を施釉し、華文を施す。上面以外は無胎。内面に轆轤による成形痕あり。	II-3層
57	沖縄産陶器	水鉢	—	口縁部	— — —	素地は橙色を呈する。口縁部下に4条の磨割ぎによる波状文あり。	II-3層

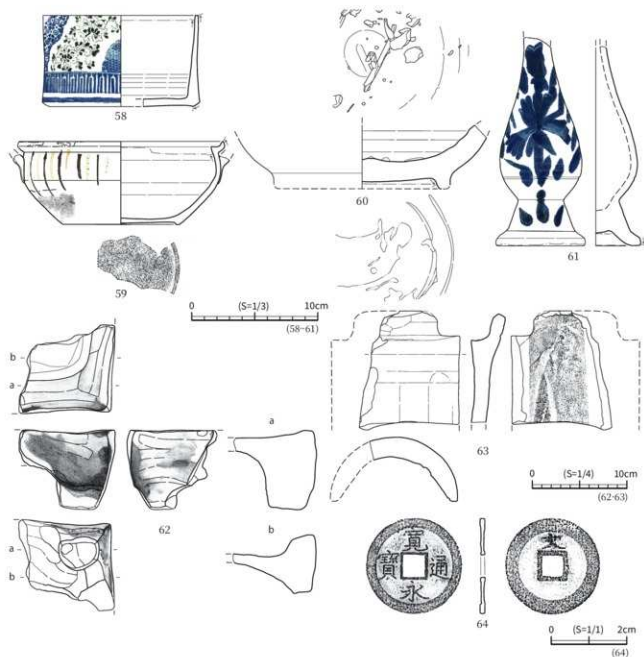


図36 I層出土遺物

表11 I層出土遺物観察一覧

番号	種類	器種	分類	部位	法量(単位:cm) ()は複元量 口径 器高 高台径	観察事項	出土地
58	本土産磁器	火取	—	口~底部	(12.3) 7.25 底径 (11.4)	直口口縁。素地は灰白色で平滑。外面の高台まで施釉。口唇部と口縁部内側を輪削ぎ。外面に窓彫りによる草花文等を施す。	I層
59	本土産陶器	皿	—	口~底部	(16.4) 6.6 底径 (9.2)	素地は灰白色を呈する。外面は胴部まで施釉し、灰白色と黄褐色の釉で縦位に縞文様を置く。内面は口唇部を除き施釉。底部外面に輪轆による成形収れびが残る。胴上部に把手あり。	I層
60	沖繩産施釉陶器	鉢	—	底部	— (14.4)	素地は灰黄褐色を呈する。両面に厚輪を厚く施釉。内底面に動物の彫付浮文。	I層
61	沖繩産施釉陶器	瓶	—	底部	— 高台最大径 7.1	高台が均状の瓶。素地は灰白色を呈する。外面に白化粧と透明釉を施釉し、呉須で草花文を置く。	I層
62	瓦質土器	火鉢?	—	底部	—	素地はにぶい褐色を呈する。雲母が混入。外側に煤が付着する。高さは8.5cm。玉縁部と筒部に全体に横位のナデが残る。玉縁部と筒部の裏側内面は面取りされており、凹部には布目が残る。凸部の端に僅かに漆喰が付着。	I層
63	明朝高瓦	丸瓦	—	玉縁部	—	新寛永(2期:初録年1668年)で裏面に「文」の文字。厚さ1.16cm。重量3.03g。	I層
64	銭貨	寛永通寶	—	—	縦 横 孔 2.5 2.5 0.6	新寛永(2期:初録年1668年)で裏面に「文」の文字。厚さ1.16cm。重量3.03g。	I層

表 16 脊椎動物遺体出土一覧

動物種	出土地	第1検出面										第2検出面							不明	合計								
		I層	II-3層								SE1	SS1	SD4				SD12	SD16			SF1							
			1層	2層	4層	13層	14層	1層	2層	3層			9層	11層	12層	2層						5層	4層					
サメ類															2											1		
ハタ科			1																								2	
魚類 合計		0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	3		
ウミガメ科															2												2	
カメ?																								1			1	
爬虫類 合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	3	
ネコ	I層														1													3
ウマ															47													52
ウシ/ウマ	II層					1	1								16	1	4	11	1									39
ブタ															6		1	1										8
イノシシ/ブタ		4	3	1	5	1	5	1	1	10					169		144	157	3	1	2	5					512	
イノシシ/ブタ?															1													1
リュウキュウイノシシ?																	1											1
ウシ		1	1											1	10	5	17	1										36
ウシ?		1													4		1											6
哺乳類 合計		9	4	1	5	2	6	1	1	11				254	1	156	192	5	1	4	5	5	5	5	5	658		
種不明						1									2			1										4
総計		9	5	1	6	2	6	1	1	11				258	1	156	194	5	2	5	5	5	5	5	5	668		

表 17 魚類出土状況

II-3層							
分類	部位	計測	左	右	不明	-	計
ハタ科	舌顎骨	-			1		1
SD4-12層							
分類	部位	計測	左	右	不明	-	計
ハタ科	前鋸蓋骨	-			1		1
SD16-5層							
分類	部位	計測	左	右	不明	-	計
サメ類	椎骨	椎体横径: 16.15mm					1

表 18 哺乳類・爬虫類出土状況 1

I層													
種類	部位	残存状況	成長	加工	病害	計測 (単位:mm)	左	右	不明	-	計		
ネコ	上腕骨	近位部・遠位部	-	-	-	遠位端最大 Bd18.55		1			1		
ウシ/ウマ	椎骨(胸椎)	破片	-	-	-	-				1	1		
	大顎骨	遠位端(内側縁)	-	-	-	-			1		1		
イノシシ/ ブタ	上顎骨	破片	-	-	-	-			1		1		
	下顎骨	下顎体dp ₁ F ₁ m ₁ m ₂ ×	dp ₂ 未萌出	-	-	-			1		1		
	距離歯(下顎)	M ₃	-	-	-	-				1	1		
ウシ	尺骨	骨幹部	-	-	-	-			1		1		
	楯骨?	遠位部	-	-	-	-			1		1		
ウシ?	尺骨?	破片	-	-	-	-				1	1		
合計									2	4	2	1	9
II-3層													
種類	部位	残存状況	成長	加工	病害	計測 (単位:mm)	左	右	不明	-	計		
イノシシ/ ブタ	頭蓋骨	前頭骨(破片)	-	-	-	-		1			1		
	肋骨	破片	-	-	-	-				1	1		
	部位不明	破片	-	-	-	-				1	1		
ウシ	楯骨	軸突起	-	-	-	-					1		
合計									1	0	2	1	4

第3章 発掘調査の方法と成果

表 19 哺乳類・爬虫類出土状況 2

SK 2-1層

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	計測 (単位:mm)	左	右	不明	-	計
イノシシ/ ブタ	部位不明	破片	-	-	-	-			1		1

SK 2-2層

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	計測 (単位:mm)	左	右	不明	-	計	
イノシシ/ ブタ	下顎骨	下部角	-	-	-	-		1			1	
		下部枝	-	叩き割り	-	-		1			1	
	肋骨	近位部	-	-	-	-			1		1	
		骨端のみ	未癒合(近位端)	-	-	-		1			1	
	部位不明	破片	-	-	-	-			1		1	
種不明	部位不明	破片	-	-	-	-			1		1	
合 計								1	2	3	0	6

SK 2-4層

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	計測 (単位:mm)	左	右	不明	-	計	
ウシ/ウマ	椎骨	椎体	-	叩き割り	-	-				1	1	
イノシシ/ ブタ	肋骨 (基節骨II/IV)	近位部-遠位端	未癒合(近位端)	-	-	-			1		1	
合 計								0	0	1	1	2

SK 2-13層

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	計測 (単位:mm)	左	右	不明	-	計	
ウシ/ウマ	大腸骨	遠位端	-	叩き割り	-	-			右?1		1	
	椎骨	椎体	-	-	-	-				1	1	
イノシシ/ ブタ	尺骨	近位部	-	-	-	-		1			1	
	大腸骨	骨端のみ	未癒合(近位端)	-	-	-			1		1	
	部位不明	破片	-	-	-	-			2		2	
合 計								1	1	3	1	6

SK 2-14層

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	計測 (単位:mm)	左	右	不明	-	計
イノシシ/ ブタ	脛骨	近位部-骨幹部	-	-	-	-		1			1

SE 1-1層

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	計測 (単位:mm)	左	右	不明	-	計
イノシシ/ ブタ	趾離歯(下顎)	I ₁	-	-	-	-		1			1

SS 1-2層

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	計測 (単位:mm)	左	右	不明	-	計	
イノシシ/ ブタ	椎骨	椎体	-	-	-	-				1	1	
		破片	-	-	-	-					1	
	肋骨	近位部	-	-	-	-		1			1	
		上腕骨	近位部	未癒合(近位端)	-	-	-		1			1
	機骨	近位端-近位部	-	-	-	-			2			2
		骨幹部	-	-	-	-				1		1
	脛骨	破片	-	-	-	-				2	2	
	部位不明	破片	-	-	-	-				1	1	
ウシ	中手・中足骨	近位端-近位部	-	-	-	-		1			1	
合 計								1	4	4	2	11

SD 4-3層

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	計測 (単位:mm)	左	右	不明	-	計
ウミガメ科	上腕骨	近位部-遠位部	-	切断?	-	-		1			1
	機骨?	近位端-近位部	未癒合(近位端)	切断	-	-				右?1	1
ネコ	中手骨(IV)	近位端-遠位部	-	-	-	-		1			1
ウマ	上顎骨	上顎体1'×	-	-	-	-		1			1

表 20 哺乳類・爬虫類出土状況 3

SD4-3層(つづき)

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	計測 (単位:mm)	左	右	不明	-	計	
ウマ	上顎骨	上顎体P ¹ P ² M ¹	—	—	—	—		1			1	
		I ¹	—	—	—	—		1			1	
		I ²	—	—	—	—		1			1	
		I ³	—	—	—	—		1			1	
		C	—	—	—	—		1			1	
		P ¹	—	—	—	—		2			2	
		P ²	—	—	—	—		2	1		3	
		M ¹	—	—	—	—		1	1		2	
	下顎骨	M ²	—	—	—	—		2			2	
		下顎体(結合部)	—	—	—	—			1		1	
		筋突起+関節突起	—	—	印き削り	—		1			1	
		下顎角	—	—	—	—		1			1	
		破片	—	—	—	—				3	3	
		I ₂	—	—	—	—		1			1	
		dP ₂	—	—	—	—		1			1	
		dP ₄	—	—	—	—		1			1	
	下顎歯(下顎)	P ₃	—	—	—	—		1	1		2	
		P ₄	—	—	—	—		1			1	
		P ₅ /M ₅	—	—	—	—				1	1	
		M ₅	—	—	—	—			1		1	
		椎骨(軸椎)	歯突起	—	—	—	—				1	1
		椎骨(胸椎)	棘突起	—	—	—	—				1	1
		椎骨	破片	—	—	—	—				9	9
寛骨		寛骨臼	—	未結合	カトナウ、切断	—		1			1	
	—	—	—	カトナウ、切断	—			1		1		
	脛骨	骨幹部-遠位端	—	—	—		1			1		
	—	骨幹部	—	加工痕あり	—				1	1		
	中足骨	近位部-骨幹部	—	—	—		1			1		
	中足骨(IV)	近位部-骨幹部	—	—	—			1		1		
	中手/中足骨	骨幹部-遠位端	—	—	螺旋状剥離	—	1			1		
	ウシ/ウマ	椎骨	椎体	—	カトナウ	—				1	1	
肋骨		近位端	—	—	—		1			1		
—		骨幹部	—	—	—				1	1		
中足骨		骨幹部	—	—	—			2		2		
—		近位部	未結合(近位端)	—	—	—			1	1		
部位不明		破片	—	—	—	—			9	1	10	
ブタ	頭蓋骨	前頭骨+頭頂骨+側頭骨+後頭骨 (右)前頭骨欠損。(左)頬骨欠損	未結合	—	—		1			1		
	—	下顎体(結合部)	—	—	—							
	下顎骨	I ₁ ×Cd ₂ P ₁ M ₁ ×(左) L ₁ L ₁ CP ₁ ×(右)	P ₂ 未萌出 ²	—	—		1			1		
	下顎骨	下顎体(結合部-下顎角) ××××dP ₁ P ₂ M ₁ M ₂ M ₃	P ₁ P ₂ M ₃ 未萌出	カトナウ?	—			1		1		
	椎骨(軸椎)	椎体	—	—	—					1	1	
イノシシ/ ブタ	肩甲骨	近位部-遠位端	—	—	—		1			1		
	尺骨	近位部-遠位部	未結合(近位端)	カトナウ	—		1			1		
	頭蓋骨	前頭骨+頭頂骨	—	—	—	—		1			1	
		頭頂骨+側頭骨+後頭骨	—	—	—	—			1		1	
		頭頂骨+後頭骨	—	—	—	—			1		1	
		頭頂骨	—	—	—	—				1	1	
		額骨	未結合	—	—	—		1			1	
		頬骨	—	—	—	—				1	1	
		側頭骨(破片)	未結合	—	—	—			1		1	
		—	—	—	—	—				1	1	
	破片	—	—	—	—				1	1		
	上顎骨	上顎体P ¹ P ²	—	—	—	—		1			1	
		上顎体(破片)	—	—	—	—			1		1	
破片		—	—	—	—		1			1		
下顎歯(上顎)	c?	—	—	—	—		左?1			1		

表 21 哺乳類・爬虫類出土状況 4

SD4-3層(つづき)

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	計測 (単位:mm)	左	右	不明	-	計	
イノシシ/ ブタ	下顎骨	下顎体×P ₁ P ₂ M ₁ M ₂ ×	—	—	—	—	1				1	
		下顎角×M ₂ M ₃ ×(左)	—	—	—	—	1				1	
		下顎体	—	—	—	—			1		1	
		結合部	—	—	—	—		2				2
		関節突起	—	切断	—	—			1			1
	遊離歯(下顎)	破片	—	—	—	—		3	2	2		7
		I ₁	—	—	—	—		2				2
		I ₂	—	—	—	—		1				1
		I ₃	—	—	—	—			1			1
		C	—	—	—	—			1			1
		P ₃	—	—	—	—				1		1
		M ₁	—	—	—	—		1				1
	椎骨(頸椎)	横突起	—	—	—	—						1
		椎体	—	—	—	—						1
		椎骨(胸椎)	椎体	—	—	—						1
		椎骨(腰椎)	椎体	—	—	—						1
	椎骨(不明)	椎体	—	—	—	—						1
		棘突起	—	—	—	—						1
		椎体	—	—	—	—						4
	肋骨	破片	—	—	—	—						6
		近位端-近位部	—	—	—	—			1			1
		近位部	—	—	—	—			1	1		2
	肩甲骨	破片	—	—	—	—				1		1
		近位部-遠位端	—	—	—	—			1			1
		近位部-遠位部	—	—	—	—				1		1
	上腕骨	近位部-遠位部	未癒合	—	溝車上孔閉鎖	—		1				1
		骨端のみ	未癒合(遠位端)	—	—	—				1		1
	橈骨	近位部-骨幹部	—	—	—	—			1			1
		近位部-骨幹部	未癒合(遠位端)	—	—	—			1			1
	尺骨	近位部-骨幹部	未癒合(遠位端)	—	—	—			1			1
		近位部-遠位部	未癒合(遠位端)	—	—	—			1			1
	中手骨(III)	近位部-遠位部	未癒合(遠位端)	—	—	—			1			1
		近位部-遠位部	未癒合(遠位端)	—	—	—			1			1
	寛骨	寛骨臼付近	—	—	—	—			1			1
		近位部-骨幹部	—	—	—	—			1	1		2
	大腿骨	近位部	未癒合(近位端)	—	—	—			1			1
		—	—	—	—	—			1			1
		近位部	未癒合(近位端)	—	—	—			1			1
	脛骨	近位部-遠位部	未癒合(遠位端)	—	—	—			1			1
		近位部-骨幹部	未癒合(遠位端)	—	—	—			1			1
	腓骨	骨幹部	—	—	—	—			1			1
		骨幹部	—	—	—	—			1	1		1
	踵骨	遠位部-遠位端	—	—	—	—			1			1
		破片	—	—	—	—					99	99
	イノシシ/ ブタ?	部位不明	破片	—	—	—					1	1
ウシ	頭蓋骨	前頭骨(破片)	—	—	—		1				1	
		側頭骨	—	—	—	—		1			1	
	椎骨(胸椎)	椎骨	—	—	—	—			1			1
		棘突起	—	—	—	—					1	1
	腕骨	近位端-遠位部	—	—	—	—			1			1
		近位端-近位部	—	切断	—	—			1			1
		腕骨	—	—	—	—			1			1
	寛骨	寛骨臼	—	—	—	—			1			1
寛骨臼		—	—	—	—			1			1	
指骨(基部骨)	近位部-遠位端	—	—	—	—			1			1	
	近位部-遠位部	—	—	—	—			1			1	
指骨(末節骨)	完形	—	—	—	—			1			1	
	破片	—	—	—	—					2	2	
ウシ?	上腕骨	骨幹部-遠位部	—	螺旋状剥離	—			1			1	
	大腿骨	遠位端	—	叩き切り	—				1		1	
種不明	部位不明	破片	—	—	—					2	2	
	合計						6	130	32	258		
							53	37				

表 22 哺乳類・爬虫類出土状況 5

SD4-9層

種類	部位	残存状況	成長	加工	病害	計測 (単位:mm)	左	右	不明	-	計
ウシ/ウマ	部位不明	破片	--	--	--	--			1		1

SD4-11層

種類	部位	残存状況	成長	加工	病害	計測 (単位:mm)	左	右	不明	-	計	
ウシ/ウマ	椎骨(頸椎)	椎突起	--	刃物痕	--	--				1	1	
		棘突起	--	カトラノ多敷	--	--					1	1
	椎骨	椎体	--	叩き	--	--				1	1	
	肋骨	骨幹部(破片)	--	--	--	--			1		1	
ブタ	大腿骨	近位部-遠位部	未癒合(近位端)	カトラノ?	--	--		1			1	
イノシシ/ ブタ	頭蓋骨	前頭骨	未癒合	--	--	--			1		1	
		頭頂骨	--	--	--	--		1	1		2	
		側頭骨	--	--	--	--	--			1		1
		後頭骨静脈突起	--	--	--	--	--			1		1
		後頭顆(破片)	--	--	--	--	--			1		1
	遊離歯(上顎)	I ¹	--	--	--	--	--		1			1
		P ² ?	未萌出	--	--	--	--			1		1
		M ¹	--	--	--	--	--		1			1
	下顎骨	下顎体dp ₂ dm ₂	--	--	--	--	--		1			1
		下顎体P ₂ M ₁	--	--	--	--	--		1			1
	遊離歯(下顎)	M ₂	--	--	--	--	--		1			1
		di ₂	--	--	--	--	--			1		1
		I ₁	--	--	--	--	--			2		2
		I ₂	--	--	--	--	--		2	1		3
		C	--	--	--	--	--		3	7		10
		dp ₂	--	--	--	--	--			1		1
		P ₁	未萌出	--	--	--	--			1		1
		P ₂	未萌出	--	--	--	--		5			5
		P ₃	--	--	--	--	--		1			1
		P ₄	--	--	--	--	--			1		1
	椎骨(頸椎)	椎体	--	--	--	--	--				1	1
	椎骨	破片	--	--	--	--	--				4	4
	肋骨	近位端-骨幹部	--	--	--	--	--		1			1
		近位部	--	--	--	--	--		1			1
	肩甲骨	近位部-遠位端	--	--	--	--	--		1			1
		近位部-骨幹部	--	--	--	--	--			1		1
		破片	--	--	--	--	--			1		1
腕骨?	近位部	--	--	--	--	--		1			1	
中手骨(IV)	近位端-遠位部	未癒合(遠位端)	--	--	--	--		1			1	
大腿骨	骨端のみ	未癒合(近位端)	--	--	--	--			1		1	
	近位部-遠位部	未癒合(近-遠位端)	--	カトラノ?	--	--		1			1	
脛骨	近位部-遠位部	未癒合(遠位端)	--	--	--	--		1			1	
	骨幹部-遠位部	未癒合(遠位端)	--	--	--	--		1			1	
腓骨	破片	--	--	--	--	--			1		1	
踵骨	近位部-遠位端	未癒合(踵骨突起)	叩き切り	--	--	--		1			1	
	部位不明	破片	--	--	--	--				89	89	
リュウキュウ イノシシ?	大腿骨	近位部-遠位部	未癒合(近-遠位端)	--	--	--		1			1	
ウシ	椎骨(頸椎)	椎突起	--	加工痕あり	--	--				1	1	
	椎骨(胸椎)	椎体	--	切断	--	--				1	1	
	椎骨	近位端	--	--	--	--			1		1	
	中手骨	遠位端	--	--	--	--			1		1	
	指骨(中節骨)	近位端-遠位端	--	--	--	--		1			1	
ウシ?	椎骨	骨幹部	--	--	--	--			1		1	
合 計								24	26	96	10	156

表 23 哺乳類・爬虫類出土状況6

SD4-12層

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	計測 (単位:mm)	左	右	不明	-	計	
ネコ	下顎骨	下顎体P ₁ M ₁	—	—	—	—	1				1	
ウマ	遊離歯(上顎)	I ¹	—	—	—	—	1				1	
		I ²	—	—	—	—	1				1	
		I ³	—	—	—	—	1				1	
	脛骨	近位部-遠位端	—	螺旋状剥離	—	—		1			1	
		骨幹部-遠位部	—	—	—	—	1				1	
ウシ/ウマ	椎骨(胸椎)	棘突起	—	—	—	—					1	
	椎骨	破片	—	切断?	—	—					1	
	大顎骨	骨幹部-遠位部	—	—	—	—				1	1	
		遠位端(歯車部)	—	—	—	—	1				1	
	部位不明	破片	—	—	—	—				7	7	
ブタ	大顎骨	近位部-遠位部	未癒合(近位端)	—	—	—		1			1	
頭蓋骨	前頭骨	—	—	—	—	—	1				1	
	前頭骨+頭頂骨	—	—	—	—	—	1				1	
	前頭骨+頭頂骨+側頭骨+後頭骨	—	—	打割?	—	—		1			1	
	頭頂骨+後頭骨	—	—	—	—	—	1				1	
	頭頂骨(破片)	—	—	—	—	—	1				1	
	側頭骨(棘骨突起)	未癒合	—	—	—	—			1		1	
	側頭骨(破片)	—	—	—	—	—			1		1	
	額骨	—	—	—	—	—			2		2	
	後頭骨(破片)	—	—	—	—	—			1		1	
	後頭顆	—	—	—	—	—			1		1	
	後頭顆(破片)	—	—	—	—	—			1		1	
	上顎骨	上顎体 dp ² × 破片	—	—	—	—	—	1			1	
	遊離歯(上顎)	I ¹	—	—	—	—	—	2				2
P ⁴		—	—	—	—	18.355		1			1	
下顎骨	関節突起-下顎角(破片)	—	—	—	—	—		1			1	
	下顎体 × P ₂ ×	—	—	—	—	—		1			1	
	下顎体 × M ₁ M ₂ ×	—	—	—	—	—		1			1	
	下顎体 M ₁ M ₂	—	—	—	—	—		1			1	
	下顎体 × × M ₁	—	—	—	—	—			1		1	
	下顎体 × × M ₂	—	—	—	—	—			1		1	
	下顎体(結合部) × × × × (右) × × × × M ₁ (左)	—	—	—	—	—			1		1	
	関節突起	—	—	—	—	—			2		2	
	破片	—	—	—	—	—				5	5	
	I ₂	—	—	—	—	—			1	2	3	
遊離歯(下顎)	C	—	—	—	—	—	2	1			3	
	dp ₂	—	—	—	—	—			3		3	
	P ₂	—	—	—	—	—			1		1	
	P ₄	—	—	—	—	—		4			4	
	M ₁	—	—	—	—	—	2	1			3	
	M ₂	—	—	—	—	—		3			3	
	椎骨	乳頭関節突起	—	—	—	—	—				1	1
	破片	—	—	—	—	—					2	2
肋骨	近位部	—	—	—	—	—			2		2	
	骨幹部	—	—	—	—	—				1	1	
肩甲骨	近位部-遠位端	—	—	—	—	—	1				1	
上腕骨	近位部	未癒合(近位端)	加工痕あり	—	—	—		1			1	
桡骨	近位端-骨幹部	—	—	—	—	—		1			1	
	近位部-遠位部	—	—	—	—	—			1		1	
大顎骨	骨幹部-遠位部	—	—	—	—	—			1		1	
	骨端のみ	未癒合(遠位端)	—	—	—	—		1			1	
	骨端のみ(破片)	—	—	—	—	—			1		1	
脛骨	近位部-遠位部	—	—	—	—	—		1			1	
	骨幹部	—	—	—	—	—				1	1	
	骨幹部(破片)	—	—	—	—	—		1			1	

表 24 哺乳類・爬虫類出土状況 7

SD4-12層 (つづき)

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	計測 (単位:mm)	左	右	不明	-	計	
イノシシ/ ブタ	脛骨	骨端のみ(破片)	-	-	-	-			1		1	
	腓骨	破片	-	-	-	-			1		1	
	距骨	遠位部・遠位端	-	-	-	-		1			1	
	部位不明	破片	-	-	-	-			87		87	
ウシ	椎骨(腰椎)	棘突起	-	かじりあり	-	-				1	1	
	肋骨	近位端・近位部	-	加工痕あり	-	-		1			1	
		破片	-	-	-	-			1		1	
	肩甲骨	遠位部・遠位端	-	-	-	-	1				1	
	手根骨(桡側)	完形	-	-	-	-			1		1	
	手根骨(中間)	骨端のみ	-	切断	-	-	1				1	
	大腸骨	遠位部	-	-	-	-		1				1
		遠位端(内側顆)	-	-	-	-		1				1
	距骨	遠位端	-	-	-	-			1		1	
	果骨	完形	-	-	-	-			1		1	
	足根骨	遠位端	-	-	-	-		左?1	1			2
		骨端のみ	-	-	-	-				1		1
	中足骨	近位端	-	-	-	-			1			1
近位部・遠位端		-	-	-	-				1		1	
指骨(中節骨)	完形	-	-	-	-			1		1		
ウシ	指骨(末節骨)	完形	-	-	-		1				1	
種不明	肋骨	骨幹部	-	-	-	-				1	1	
合 計								1		115	6	193
								37	34			

SD12-2層

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	計測 (単位:mm)	左	右	不明	-	計	
ウシ/ウマ	肋骨	骨幹部	-	-	-	-			1		1	
イノシシ/ ブタ	趾離爪(下顎)	1)	-	-	-	-	1				1	
	大腸骨	近位骨端のみ	-	叩き切り	-	-			1		1	
	部位不明	破片	-	-	-	-			1		1	
ウシ	下顎骨	関節突起	-	-	-	-		1			1	
合 計								1	1	3	0	5

SD16-5層

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	計測 (単位:mm)	左	右	不明	-	計
イノシシ/ ブタ	椎骨	近位端・骨幹部	-	-	-	-		1			1

SF1-4層

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	計測 (単位:mm)	左	右	不明	-	計	
カメ?	部位不明	破片	-	-	-	-			1		1	
ウシ/ウマ	部位不明	破片	-	-	-	-			2		2	
イノシシ/ ブタ	脛骨	近位部・骨幹部	-	-	-	-	1				1	
	部位不明	破片	-	-	-	-				1	1	
合 計								1	0	4	0	5

不明

種類	部位	残存状況	成長	加工	病変	計測 (単位:mm)	左	右	不明	-	計
イノシシ/ ブタ	部位不明	破片	-	-	-	-			5		5

表 25 巻貝類出土状況 1 (番号は図版 25 ~ 27 と一致)

番号	科名	貝種名	出土地 生息地	第1検出面		第2検出面				合計			個体数			
				SK2-2層	SK2-13層	SD4-3層		SD4-11層		SD4-12層		完形		殻破	破片	
				完形	殻破	完形	破片	完形	破片	完形	破片					
1		ニシキウズ	I-2-a			7	4			3	0	7	7	7		
2		ムラサキウズ	I-3-a			2	2				0	2	2	2		
3		ギンタカハマ	I-4-a			5	7			3	2	1	3	7	8	10
4	ニシキウズ科	サラサバテイラ	I-4-a	1		3	1			1	1	1	1	5	2	6
5		オキナワイシダタミ	II-1-b			122	4	23			122	4	23	126		
—		イシダタミ	II-1-b							1	0	1	0	1		
—		ニシキウズ科不明					1				0	0	1	1		
—		ヤコウガイ	I-4-a			1				1	2	0	2	2	2	
6		チョウセンサザエ	I-3-a			1	3			16	6	2	17	9	2	26
7		チョウセンサザエの蓋	I-3-a			3				3			6	0	0	6
8	リュウテン科	コシダカサザエ	I-2-a			1							1	0	0	1
9		カンギク	II-1-b			1443	84	26		89	7	1532	91	26	1623	
10		カンギクの蓋	II-1-b			36						36	0	0	36	
11		オオウラウス	I-2-a				1			2		2	0	1	2	
12		コシダカアマガイ	I-1-b			47	2			2	2	1	49	4	1	53
13	アマオブネ科	マルアマオブネ	II-1-b			460	25	14				460	25	14	485	
14		アマオブネ	I-1-b			1	1					1	0	1	1	
15		オニノツノガイ	I-2-c			1	47	22		1	9	2	2	56	24	58
16	オニノツノガイ科	コゲツノブエ	III-1-c			1	2			3	2	1	5	2	6	
—		カヤノミカニモリ	I-1-b							1	0	0	1	1		
17		タワノミカニモリ	I-1-b			1	1					1	1	0	2	
18	ウミナナ科	リュウキュウウミナナ	II-1-c			1	2	2				1	2	2	3	
19	ヘナタリ科	フトヘナタリ	III-0-d				12	320				0	12	320	12	
20		カワアイ	III-1-c							1	2	0	1	2	1	
21		オハグロガイ	II-2-c			22	7	12		2		24	7	12	31	
22		ネジマガキ	I-2-c			3	2	1				3	2	1	5	
23	スイショウガイ科	マガキガイ	I-2-c			47	39	10		13	15	6	60	54	16	114
—		イボンデガイ	I-2-c					1				0	0	1	1	
24		クモガイ	I-2-c			1	5	15		1	7	22	2	12	37	14
—		スイショウガイ科不明				1	13					1	13	0	14	
—		ホシダカラ	I-2-a				3			1	1	0	1	4	1	
25		ホシキヌタ	I-2-a				1	1				0	1	1	1	
—		コモンダカラ	I-1-a					1				0	0	1	1	
26	タカラガイ科	ハナヒラダカラ	I-1-a	1	1	2	1	17				3	2	17	5	
27		キイロダカラ	I-1-a			1						1	0	0	1	
28		ハナマルユキ	I-3-a							1	15	1	0	15	1	
—		タカラガイ科不明					4				2	0	0	6	1	
29		トミガイ	I-2-c			2						2	0	0	2	
30	タマガイ科	ヘソアキトミガイ	I-2-c			7	1					7	1	0	8	
31		ホウシュノタマガイ	II-1-c			416	27	5		7	2	423	29	5	452	
32	オキニシ科	オキニシ	I-3-a				5	5			1	10	0	6	15	6
33		シロナルトボラ	I-4-a									1	0	0	1	1
34	フジツガイ科	ミツカドボラ	I-2-a			3	3	4		1	2	4	5	4	9	

※完形と殻破の数を足した合計を個体数とした。(破片でのみ出土した貝種については、最小個体数「1」として数えた)

表 26 巻貝類出土状況 2 (番号は図版 25 ~ 27 と一致)

番号	科名	貝種名	出土地 生息地	第1検出面		第2検出面			合計			個 体 数											
				SK2-2層	SK2-13層	SD4-3層	SD4-11層	SD4-12層	完	殻	破		完	殻	破								
				形	頂	形	頂	形	頂	形	頂		形	頂	形	頂	破						
—	フジツガイ科	ホラガイ	I-4-a							4	0	0	4	1									
35		ガンゼキボラ	I-4-a			3	2	4		3	1	6	2	5	8								
36		ウネレイシダマシ	I-1-b			11		1				11	0	1	11								
37	アッキガイ科	アカイガレイシ	I-3-a			1						1	0	0	1								
38		ツノレイシ	I-3-a			1			9			10	0	0	10								
39		シラクモガイ	I-3-a						1			0	1	0	1								
40		テツレイシ	I-1-a			1						1	0	0	1								
41	オニコブシ科	オニコブシ	I-3-a							1		0	0	1	1								
42		コオニコブシ	I-3-a	1		12	4	5		22	1	34	4	7	38								
—		オニコブシ科不明								2		0	0	2	1								
43	フトコロガイ科	フトコロガイ	II-2-d			3						3	0	0	3								
44	オリエレヨフバイ科	イボヨフバイ	II-1-c			13	2		2	1		15	3	0	18								
45		カニノテムシロ	III-1-c			1		2				1	0	2	1								
46		ヒメオリエレムシロ	II-2-c			2	1					2	1	0	3								
47	バイ科	シマベッコウバイ	II-1-c			3						3	0	0	3								
48	イトマキボラ科	イトマキボラ	I-2-a		1	2	1	2		2	2	4	2	4	6								
49		ナガイトマキボラ	I-2-a			3	1					0	3	1	3								
—		イトマキボラ科不明				2						0	2	0	2								
50	イモガイ科	ナンヨウクロミナシ	II-2-c					8		2	2	0	2	10	2								
51		クロフモドキ	I-2-c	1		2	6			1	1	0	3	8	3								
52		クロザメモドキ	I-2-c			1	1					0	1	1	1								
53		マダライモ	I-1-a	1		1	4					2	0	4	2								
54		サヤガタイモ	I-1-a			1	3					1	0	3	1								
55		ジュズカケサヤガタイモ	I-1-a								1	0	0	1	1								
—			ゴマフイモ	I-2-c			1					0	1	0	1								
56			サラサミナシモドキ	I-2-c							2		0	0	2	1							
57			ヤナギシボリイモ	I-2-a		1		7	1	3	9	0	3	18	3								
58			イボカバイモ	I-2-c							2		0	0	2	1							
—			イボシマイモ	I-2-a			1					0	1	0	1								
59		ニシキミナシ	I-2-c							1		0	0	1	1								
60		アジロイモ	II-2-c				1				0	0	1	1									
—		イモガイ科不明				2	10			2	0	2	12	2									
—	タケノコガイ科	タケノコガイ科不明				1					0	0	1	1									
—	巻貝不明					1				1	0	0	2	1									
61	トウガタカワニナ科	トウガタカワニナ	IV-5-6			1	6		3		4	6	0	10									
62		スノメカワニナ	IV-6			4					4	0	0	4									
63	ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	V-8			2					2	0	0	2									
—	アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ	V-9				1				0	0	1	1									
64	オナジマイマイ科	バンドナマイマイ	V-8			1					1	0	0	1									
—		オキナワウスカワマイマイ	V-9			2					2	0	0	2									
—	陸産貝不明									3	7	0	3	7	3								
合 計					1	2	2	1	1	1	2688	332	561	0	0	1	183	72	113	2873	407	678	3297

※完形と殻頂の数を足した合計を個体数とした。(破片でのみ出土した貝種については、最小個体数「1」として数えた)

表 27 二枚貝出土状況 1 (番号は図版 27・28 と一致)

番号	科名	貝種名	生息地	第1検出面						第2検出面										
				SK2-2層			SK2-13層			SD4-3層										
				完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片								
1	フネガイ科	フネガイ	I-2-a								4	1	1	1						
2		エガイ	I-1-a								3	3								
3		カリガネエガイ	II-1-a								2	5								
4		ベニエガイ	I-2-a								2	2	1							
5		リュウキュウサルボオ	II-2-c								87	99	1	16	2					
6	イガイ科	リュウキュウヒバリガイ	I-1-a								1									
7	ウグイスガイ科	ミドリアオリ	I-1-a								3	2	3	2						
8	マクガイ科	カイシブアオリの一種									2	1								
9	ミノガイ科	ミノガイ	I-2-a								1		1							
10	イタキガイ科	チサラガイ	I-2-a			1														
11	ウミギク科	メンガイの一種									19	9	4	3	7					
—	イタボガキ科	ノコギリガキ	II-2-a										1							
—		イタボガキ科不明																		
12	ツキガイ科	ウラキツキガイ	II-2-c								605	570	81	56	19					
13		ヒメツキガイ	I-2-c								17	19		1	7					
14		カブラツキガイ	II-2-c																	
15	ザルガイ科	リュウキュウザル	II-2-c								6	11	2		1					
16		カワラガイ	II-2-c				1				272	311	37	15	12					
17		ヒメシャコ	I-2-a								1			1	1					
18	シャコガイ科	オオシラナミ(シラナミ)	I-2-a								13	7	1	1	14					
—		シャコガイ科不明																		
19	バカガイ科	リュウキュウバカガイ	II-2-c								4	2								
20		ユキガイ	II-2-c											1						
—		バカガイ科不明									274	260	97	90	109					
21		サメザラ	I-2-c								7	14	1		1					
22	ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	II-1-c				1				2280	2937	381	298	360					
23		ヌノメイチョウシラトリ	III-1-c										2							
24	イソシジミ科	リュウキュウマスオ	II-1-c								1									
25	マルスダレガイ科	アラヌノメ	I-2-a								7	2	2		2					
26		ヌノメガイ	II-1-c								3	3								
27		アラスジケマン	III-1-c								35	40								
28		ホソスジイナミ	II-1-c								133	119	1	7						
29		ユウカゲハマグリ	II-2-c								1	2								
30		オトコエシハマグリ										1								
31		オノカガミ	II-2-c									127	25	2	2					
32	ヒメリュウキュウアサリ	II-2-c									1	1		1	1					
33	ヒメアサリ	II-2-c									1	2								
34	スダレハマグリ	II-2-c									5	5								
35	ダテオキシジミ	III-1-c									1									
—		マルスダレガイ科不明																		
合 計				0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	3916	4456	617	495	536

※完形と殻頂の右同士・左同士を足して、多い方を個体数とした。(破片でのみ出土した貝種については、最小個体数「1」と数えた)

表 28 二枚貝出土状況 2 (番号は図版 27・28 と一致)

番号	科名	貝種名	生息地	第 2 検出面												個体数			
				SD4-12層						SD4-13層							合計		
				完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形			殻頂		破片
L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片					
1	フネガイ科	フネガイ	I-2-a								4	1	1	1	0	5			
2		エガイ	I-1-a	16	11	2	1				19	14	2	0	1	21			
3		カリガネエガイ	II-1-a		2							2	7	0	0	0	7		
4		ペニエガイ	I-2-a									2	2	1	0	0	3		
5		リュウキュウサルボオ	II-2-c	171	143	9	7	6				258	242	10	23	8	268		
6	イガイ科	リュウキュウヒバリガイ	I-1-a	1	1	2	5			1	2	1	0	2	6	3			
7	ウグイスガイ科	ミドリリアオリ	I-1-a								3	2	3	2	0	6			
8	マクガイ科	カシミアオリの一種									0	2	1	0	0	2			
9	ミノガイ科	ミノガイ	I-2-a								1	0	0	1	0	1			
10	イタキガイ科	チサラガイ	I-2-a								0	0	1	0	0	1			
11	ウミギク科	メンガイの一種		4	10		2				23	19	4	3	9	27			
—	イタボガキ科	ノコギリガキ	II-2-a								0	0	1	0	0	1			
—		イタボガキ科不明						1			0	0	0	0	1	1			
12	ツキガイ科	ウラキツキガイ	II-2-c	34	38	3	2				639	608	84	56	21	723			
13		ヒメツキガイ	I-2-c								17	19	0	1	7	20			
14		カブラツキガイ	II-2-c	1	2		3				1	2	0	0	3	2			
15	ザルガイ科	リュウキュウザル	II-2-c	2	3		3				8	14	2	0	4	14			
16		カワラガイ	II-2-c	8	9	3	4				280	321	40	19	12	340			
17		ヒメシャコ	I-2-a								1	0	0	0	1	1			
18	シャコガイ科	オオシラナミ(シラナミ)	I-2-a	10	10		7				23	17	1	1	21	24			
—		シャコガイ科不明								1	0	0	0	0	1	1			
19	バカガイ科	リュウキュウバカガイ	II-2-c								4	2	0	0	0	4			
20		ユキガイ	II-2-c								0	0	0	1	0	1			
—		バカガイ科不明		3	3						277	263	97	90	109	374			
21	ニッコウガイ科	サメザラ	I-2-c	7	13	3	1	5			14	27	4	1	6	28			
22		リュウキュウシラトリ	II-1-c	590	672	125	13	320			2870	3610	506	311	680	3921			
23		ヌノメイチョウシラトリ	III-1-c	1	1						1	3	0	0	0	3			
24	イソシジミ科	リュウキュウマスオ	II-1-c								1	0	0	0	0	1			
25		アラヌノメ	I-2-a	8	7		2	1			15	9	2	2	3	17			
26		ヌノメガイ	II-1-c	5	7						8	10	0	0	0	10			
27		アラスジケマン	III-1-c						14	6		3	2			49			
28		ホソスジイナミ	II-1-c	18	13	3	6	6			151	132	4	13	6	155			
29		ユウカゲハマグリ	II-2-c								1	2	0	0	0	2			
30		オトコエシハマグリ									0	1	0	0	0	1			
31		オノカガミ	II-2-c	1	1						128	26	2	2	0	130			
32	マルスダレガイ科	ヒメリュウキュウアサリ	II-2-c								1	1	0	1	1	2			
33		ヒメアサリ	II-2-c								1	2	0	0	0	2			
34		スダレハマグリ	II-2-c				1				5	5	0	0	1	5			
35		ダチオキシジミ	III-1-c								1	0	0	0	0	1			
—		マルスダレガイ科不明							2		0	0	0	0	2	1			
—		合計			880	946	148	35	365	14	6	0	3	4	4810	5410	766	533	905

※完形と殻頂の右同士・左同士を足して、多い方を個体数とした。(破片でのみ出土した貝種については、最小個体数「1」と数えた)

第4章 総括

今回の発掘調査では、那覇空港自動車道（小禄道路）建設計画に伴う工事範囲のうち、市文化財課による試掘調査結果を踏まえ、埋蔵文化財に影響を及ぼす204㎡の範囲を特定し、記録保存のための調査を実施した。

以下では、発掘調査によって明らかになった宮城平田原遺跡の遺構と遺物について総括とする。

遺構

調査では表土の攪乱層を重機掘削し、攪乱層の下より検出した遺構から調査対象とした。調査を進めるなかで遺構は近世と近代の2つの時期に区分できる可能性が窺えたため、検出面ごとに記録している。

第1検出面では、方形石組遺構（SK 1、SK 2）、井戸跡（SE 1）、溝状遺構（SD 1）、石敷遺構（SS 1）を確認することができた。

方形石組遺構（SK 1、SK 2）は、調査区の北東側で検出した。2基とも北東—南西の軸をもち、石列の配置も類似していることから、築造・使用時期はほぼ同時期と推定される。また、SK 2に至っては遺構の底部に敷石を確認することができた。深みをもつ遺構の形状に加えて、宮城地域の戦前の集落の様子を再現したジオラマではクムイ（生活用水の水溜め）が数箇所みられることもあり、この方形石組遺構も水を溜めるなどの機能を有していたと推測される。

井戸跡（SE 1）はSK 2の南側に位置し、10～30cm大の石灰岩の切石によって構築されていた。切石は野面積みで、石の大きさが上部にかけて小さくなるのが特徴的である。井戸は第2検出面で確認した溝状遺構（SD 4）を掘り込んで構築され、1層からは近代のものと思われる遺物が出土している。そのため、近代に築造され戦後まで使用していた可能性がある。

溝状遺構（SD 1）は、調査区西壁及び南側で確認され、戦前の航空写真などから道路に伴う排水用の溝と推測される。堆積状況から戦前まで利用していたと考えられる。

石敷遺構（SS 1）は、当初第2検出面で確認した道跡（SF 1）と同時期の遺構と考えていたが、道跡を掘り込んでつくられていたため、構築・使用時期は異なるものと推測される。

第2検出面では、溝状遺構（SD 2～SD17）及び道跡（SF 1）を確認することができた。

溝状遺構（SD 2～SD17）は複数検出しており、壁面のみで確認できた遺構もあるが、調査を行った範囲で同時期に同地点を繰り返し掘り込んでいる痕跡やラミナがみられることから、これらは区画を示す境界や排水のために利用されていたと考えられる。

道跡（SF 1）は、北西から南東に軸をもち、その長さは調査範囲外に及ぶものであった。道跡を構築する石列は、西側のみに面及び溝状の掘り込みを有することから東側に路面を持つ道であったと推測される。

遺物

今回の調査では、総数 18,048 点の遺物が出土している。そのうち 998 点が人工遺物であり、半数以上が沖縄産陶器である（表 12～15）。

遺構内遺物を検出面別にみると、沖縄産陶器は施釉陶器も無釉陶器も両検出面で出土している。無釉陶器は検出面ごとに出土数・器種ともに差がみられ、第2検出面では第1検出面にはない急須や火炉が出土している。施釉陶器は第2検出面の108点に対して、第1検出面では192点と多く出土しており、検出面ごとに様相が異なる。C-2類は第1検出面の遺構から出土しているが、第2検出面の遺構からは出土せず、A類が多く出土している。器種は両検出面において共通している。

中国産の青磁、白磁、青花も出土しており、これらについては第2検出面で出土量が多い傾向にある。特に、福建・広東を産地とする青花が溝状遺構（SD 4～16）で多く確認された。また、褐染染付も1点出土している。

本土産陶磁器も確認されたが、第2検出面での出土数は少なく、ほとんどが第1検出面で出土している。うち1点は、陶器の鎊が確認された。

陶質土器と瓦質土器は両検出面においてそれぞれ同程度の量が出土している。瓦質土器は、北谷町の『平安山原B遺跡』において出土が報告されている馬蹄形燈炉と類似する資料の一部が出土しており、今回の報告では火炉として2点掲載している。

明朝系瓦も32点出土しているが、うち14点が第1検出面からの出土となっている。

青銅製品として簪が5点出土しており、うち4点は第2検出面からの出土となっている。1点を除き完形。

銭貨は裏面に「文」の文字を有する「文銭」と呼ばれる寛永通寶が1点出土している。

その他、器種不明の土器や円盤状製品、煙管、サンゴ石を加工した石鍾などが出土しているが、いずれも少数の出土となっている。

これら遺物の出土状況の特徴としては、第1検出面の遺構からは本土産磁器や沖縄産陶器のC-2類が主に出土し、また、第2検出面の遺構からは中国産磁器や沖縄産陶器のA類が主に出土していることから、当初想定した第1検出面が近代、第2検出面が近世の遺構であることが確認できた。

また、今回の調査では自然遺物の脊椎動物遺体及び貝類遺体を多数検出したため、全て手作業で取り上げた。

資料は県立埋蔵文化財センターが所蔵する現生標本を参考に同定作業を行った。加えて、同定作業中に丸山真史氏（東海大学）に脊椎動物遺体の分析指導をいただいた。

分析対象となった脊椎動物遺体の破片数は668点に及び、このうち1層から9点、第1検出面から33点、第2検出面の遺構から621点、残り5点は出土地不明となっている。その種類別について、脊椎動物遺体については魚類、爬虫類、哺乳類に分けられた（表16）。

表16の集計数は同定標本数（NISP）で示しており、最小個体数については算出してない。また、出土した脊椎動物の種類は表3に示した。

脊椎動物遺体は、出土量の大部分を哺乳類が占め、魚類や爬虫類については極少数との結果になった。哺乳類の中でも、イノシシ/ブタが出土数の9割近くを占めており、カットマークなどの解体痕が入る破片も確認できた。また、比較的若い個体の骨に解体痕もみられる。このような出土状況の背景として、近代の宮城地域ではイモの栽培に伴ったブタの飼育を行っていたとの文献記録もあることから、家畜及び食用としてのブタがいたものと考えられる。イノシシ/ブタの骨はほぼ全ての遺構から出土するが、近世の遺構においてブタと判別できる骨も検出されているため、ブタは比較的早い段階で人間の生活に近い存在であった様子も窺える。さらに哺乳類の骨としてウマとウシも検出されており、こちらも解体痕がみられることからブタと同時期に何らかの形で利用されていたものと推測される。

貝類遺体についても、県立埋蔵文化財センターが所蔵する現生標本を参考に同定作業を行った。

分析対象となった総数は16,382点に及び、このうち第1検出面の方形石組遺構（SK2）から11点、第2検出面の溝状遺構（SD4）から16,371点と出土数に大きく差が出る状況となっている。

種類別にみると、巻貝が3,958点、二枚貝が12,424点となっている。内訳は巻貝が19科68種、二枚貝が15科36種が確認できた。陸産貝である貝も4科6種が確認されている。

巻貝及び二枚貝の最小個体数をそれぞれ算出し、表25～表28に示した。貝の生息場所の分類を表4で示したところ1（外洋—サンゴ礁域）が半数を占める結果となった。このような場所は小浜地域の海岸にもみられることから日常的に貝を収集していた可能性が窺える。

まとめ

発掘調査の結果、宮城平田原遺跡からは近世から近代にかけての遺構を確認することができた。

近世の遺構は、道跡や溝状遺構を確認し、これらは集落の区画や排水溝として利用されていたと推測される。

近代の遺構は、高低差のある地形を解消するための造成層（II-1～3層）の上面で方形石組遺構や井戸跡、溝状遺構、石敷遺構を確認した。過去の測量地図などから、これらは戦前まで存在していた高宮城集落で使用されていた遺構と考えられる。

これらの状況は、文献記録で所在する那覇市宮城一帯の地名が17世紀半ばから確認され、沖縄戦以前まで数回にわたり地名の変遷がありつつ、当時の人々が集落を形成し生活していたとの記述からも窺える。



図3 宇高宮城航空写真（1945年1月3日撮影）と調査区重ね図（左）及び拡大図（右）

引用・参考文献

- 沖縄県教育委員会 1998『湧田古窯跡(1)―県庁舎議会議
棟建設に伴う緊急発掘調査―』第121集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『天界寺跡(1)―首
里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調
査―』第2集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2017『東村跡―沖縄県立離
島児童支援センター建設に伴う緊急発掘調査報告書―』
第92集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『神山古集落―普天間
飛行場雨水排水施設整備に伴う発掘調査報告書―』
第99集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『大嶺村跡―那覇空港
事務所管制塔庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調
査報告書―』第101集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2021『鏡水原遺跡―那覇空
港自動車道(小祿道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘
調査報告書―』第108集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2021『中城御殿跡(首里高
校内)・楯園跡―首里高校校舎改築に伴う発掘調査
(2)―』第110集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2022『普天間石川原第一遺
跡・普天間グスクンニー遺跡・普天間下原古墓群―
キャンプ瑞慶覧内東普天間住宅地区に係る文化財発
掘調査報告書―』第111集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2023『鏡水原遺跡―那覇空
港自動車道(小祿道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘
調査報告書(2)―』第113集
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1998『沖縄のやきもの―南海か
らの香り―』佐賀県九州陶磁文化館
- 下中直人 2002『沖縄県の地名』平凡社
- 小渡清孝 2004『小祿間切の形成・発展とその社会』『会
報 ガジャンピラ第4号』うるくの歴史と文化を語
る会
- 田名真之 1993『南島地名考』ひるぎ社
- 北谷町教育委員会 2016『平安山原遺跡―桑江伊平土地
区画整理事業に伴う発掘調査事業(平成19・21・22・
23年度)―』第38集
- 豊見城村史編纂委員会 1964『豊見城村史』豊見城村役場
- 豊見城村教育委員会 1988『豊見城村の遺跡』第3集
- 永井久美男 1996『日本出土銭総覧 1996年版』兵庫
埋蔵銭調査会

- 那覇市企画部市史編集室 1974『那覇市史 通史篇 第2
巻 近代史』那覇市役所
- 那覇市市民文化部文化財課 2014『小祿村跡―森口公園整
備事業に伴う緊急発掘調査報告』第97集
- 東恩納寛淳 1950『南島風土記―沖縄・奄美大島地名辭典
―』沖縄文化協會・沖縄財団
- 宮城誌編集委員会 2006『宮城誌』那覇市宇宮城自治会

图 版

图 版



南西から（2022年10月撮影）



西から（2022年10月撮影）

図版1 調査箇所遠景



調査区設定



磁器探査作業

図版2 作業状況1



重機掘削作業



遺構検出作業 1

図版 3 作業状況 2



遺構検出作業 2



遺構検出作業 3

図版 4 作業状況 3



遺構検出作業 4



平面測量作業

図版 5 作業状況 4



壁面清掃作業



埋め戻し後

図版 6 作業状況 5



第1検出面 完掘状況



第2検出面 完掘状況

図版7 調査区全体1



調査区完掘状況1 北から



調査区完掘状況2 南東から

図版8 調査区全体2



SK 1 半截状況 東から



SK 1 完形状況 西から

図版9 遺構 1



SK 2 検出状況 東から



SK 2 半截状況1 北西から



SK 2 半截状況2 北西から



SK 2 完掘状況 北西から

図版 11 遺構 3



SE1 検出状況 南東から



SE1 半載状況 西から



SD 4 検出状況 北西から



SD 4・5 検出状況 北西から

図版 13 遺構 5



SF1・SS1 検出状況 南から



SF1・SS1 検出状況 北から

図版 14 遺構 6



SF1・SS1 検出状況 南西から



SF1・SS1 完掘状況 南東から

図版 15 遺構 7



図版 16 出土遺物 1



図版 17 出土遺物 2



図版 18 出土遺物 3



図版 19 出土遺物 4



図版 20 出土遺物 5



図版 21 出土遺物 6



図版 22 脊椎動物遺体 1

サメ類 1. 椎骨 (SD16-5層) ハタ科 2. 舌顎骨右 (II-3層) 3. 前腮蓋骨右 (SD4-12層) ウミガメ科 4. 上腕骨左 (切断?) (SD4-3層)
 5. 桡骨? 右? (切断) (SD4-3層) ネコ 6. 下顎骨 P₁P₂M₁ 左 (SD4-12層) 7. 上腕骨左 (I層) 8. 中手骨IV 左 (SD4-3層)
 ウマ 9. 上顎骨 P²P¹P¹M² 右 (SD4-3層) 10. 上顎骨 C 左 (SD4-3層) 11. 上顎骨 M¹(12と同一個体) 左 (SD4-3層) 12. 上顎骨 M¹(11と同一個体) 左 (SD4-3層) 13. 下顎骨 I₁×P₁P₂P₃ 左 (SD4-3層) / P₁P₂P₃ 右 (SD4-3層) 14. 下顎骨 dp₁ 左 (SD4-3層) 15. 下顎骨 dp₂ 左 (SD4-3層) 16. 下顎骨左 (叩き割り) (SD4-3層) 17. 軸椎 (SD4-3層) 18. 寛骨右 (カットマーク、切断) (SD4-3層) 19. 脛骨右 (螺旋状剥離) (SD4-12層) 20. 中足骨IV 右 (SD4-3層)
 21. 中手/中足骨左 (螺旋状剥離) (SD4-3層) ※ () 未測定



図版 23 脊椎動物遺体 2

ウシ/ウマ 22. 頸椎 (対物痕)(SD4-11層) 23. 胸椎 (SD4-12層) 24. 椎骨 (印き)(SD4-11層) 25. 肋骨左 (SD4-3層) ウシ 26. 軸椎 (加工痕あり)(SD4-11層) 27. 椎骨左 (切断)(SD4-3層) 28. 寛骨右 (SD4-3層) 29. 手眼骨 (橈側) 左右不明(SD4-12層) ウシ? 30. 上腕骨右 (螺旋状洞縁)(SD4-3層) 31. 大腿骨 左右不明 (印き切り)(SD4-3層) イノシシ/ブタ 32. 下顎骨 (dp.)P₁m₁m₂×右 (I層) 33. 下顎骨 (カットマーク)右 (SK2-2層) 34. 肋骨左 (SD4-11層) 35. 上腕骨左 (SD4-3層) 36. 橈骨右 (SD4-12層) 37. 中手骨III右 (SD4-3層) 38. 中手骨IV左 (SD4-11層) 39. 脛骨右 (カットマーク)(SD4-11層) 40. 踵骨左 (印き切り)(SD4-11層) 41. 基節骨II/IV 左右不明(SK2-4層) リュウキュウイノシシ? 42. 大腿骨右 (SD4-11層) ※ () 未萌出



図版 24 脊椎動物遺体 3

ブタ 43. 頭蓋骨左右(SD4-3層) 44. 下顎骨 $I_1 \times Cdp, P_1, P_1, M_1 \times$ (左) $I_1, I_1, C(P_1) \times$ (右)(SD4-3層) 45. 下顎骨 $\times \times \times C \times dp_1(P_1, P_1) M_1, M_1$ 右 (カッターマーク?) (SD4-3層) 46. 軸椎(SD4-3層) 47. 肩甲骨左(SD4-3層) 48. 尺骨左(カッターマーク)(SD4-3層) 49. 大腿骨右(SD4-12層)
※()未萌出



図版 25 巻貝 1 (番号は表 25・26 と一致)



図版 26 巻貝 2 (番号は表 25・26 と一致)



図版 27 巻貝 3・二枚貝 1 (番号は表 25～27 と一致)



図版 28 二枚貝 2 (番号は表 27 と一致)

報告書抄録

ふりがな	みやぐすくひらたばるいせき							
書名	宮城平田原遺跡							
副書名	那覇空港自動車道(小禄道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(3)							
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第116集							
編著者名	馬上理恵子、宮城淳一							
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 TEL 098-835-8751・8752 FAX 098-835-8754							
発行年月日	2024年3月15日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
宮城平田原遺跡 <small>みやぐすくひらたばるいせき</small>	沖縄県 那覇市 宮城小字平田原 (陸上自衛隊 那覇駐屯地内)	47201	—	26° 11' 11"	127° 39' 19"	20220818 ～ 20221130	204㎡	那覇空港自動車道(小禄道路)建設に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宮城平田原遺跡	集落跡	近世 近代	道跡 溝状遺構 石敷 井戸 方形石組遺構	中国産陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産陶器、陶質土器、瓦質土器、土器、明朝系瓦、円盤状製品、ガラス製品、青銅製品、銭貨、漆管、石製品、プラスチック製品、脊椎動物遺体、貝類遺体		近代の溝状遺構から大量の獣骨や貝が出土。食料残渣とみられる。資料残滓とみられる。		
要約	<p>那覇空港自動車道(小禄道路)建設に伴い、影響範囲に所在する埋蔵文化財の記録保存調査を実施した。発掘調査の結果、近世から近代にかけての様々な遺構や遺物が確認された。近世の遺構では道跡と溝状遺構が検出され、溝状遺構の堆積状況から同じ場所を複数回にわたって利用している可能性を窺うことができた。さらに、SDからは食糧残渣とみられる大量の獣骨や貝などの自然遺物が出土している。近代の遺構は、生活用水の水溜めとして使用していたとみられる方形石組遺構や、井戸跡、溝状遺構を検出した。現在、本遺跡は陸上自衛隊那覇駐屯地内に所在するが、これらの遺構と遺物は字誌や航空写真などの資料から、戦前まで利用されていたものと考えられる。</p>							

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第116集

宮城平田原遺跡

－ 那覇空港自動車道（小禄道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（3）－

発行日 令和6（2024）年3月15日

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

TEL：098-835-8751・8752 FAX：098-835-8754

印刷 株式会社 国際印刷

〒901-0147 沖縄県那覇市宮城1-13-9

TEL：098-857-3385

